

スポーツ庁委託事業

平成27年度コーチング・イノベーション推進事業
「アスリート・アントラージュ」の連携協力推進

報 告 書

平成28年3月

公益財団法人 日本オリンピック委員会

目次

1 はじめに	2
2 事業の内容	3
3 事業の結果	4
【1】パラリンピック競技種目選手に潜在する、 選手の成長を阻害する要因についての調査	4
① 障害者スポーツの種類と支援のあり方	4
② 調査概要	6
③ 調査結果	6
④ 障害者スポーツにおけるアスリート・アントラージュの課題	17
【2】アスリート・アントラージュに向けた教育プログラムの開発	19
① プログラム開発(1)	19
② 教育プログラムの調査	37
③ プログラム開発(2)	38
④ 教材の概要	39
⑤ 検証	43
⑥ 課題	48
4 課題への対応	50
5 おわりに	53
資料	54

1 はじめに

本委託事業「アスリート・アントラージュの連携協力推進」は、平成 25 年に文部科学省が設置した「スポーツ指導者の資質向上のための有識者会議（タスクフォース）報告書」において提言された、「新しい時代にふさわしいコーチング及びコーチ」を確立するための方策のひとつとして、昨年（平成 26 年度）より日本オリンピック委員会が受託して実施したものである。

タスクフォースが提言した「新しい時代にふさわしいコーチング及びコーチ」とは、我が国のスポーツ界から暴力が一掃されるとともに、少子高齢化や高度情報化、グローバル化の進展といったスポーツや社会を取り巻く環境の変化に対応したものを指している。

タスクフォースの提言に基づく本委託事業「アスリート・アントラージュの連携協力推進」では、コーチング環境をオープン化して改善するために、コーチング環境に関わり、競技者・チームを支える関係者、すなわちアスリート・アントラージュ（コーチ、家族、マネージャー、トレーナー、医師、教員、関係団体など）の連携協力を推進することを目的に、平成 26 年度は課題分析を中心に、本年度は連携協力を推進するための研修プログラム等の具体的なあり方を中心に検討した。

本報告書は、それら実施した事業の内容をまとめたものである。

2 事業の内容

本事業の目的を達成するために、本年度は以下の事業を実施した。

【1】パラリンピック競技種目選手を対象にした調査

平成 26 年度「アスリート・アントラージュの連携協力推進」事業にて実施されたアスリート・アントラージュの課題把握調査をうけ、本年度はパラリンピック競技種目選手に潜在する、選手の成長を阻害する要因についての調査を実施した。

障害者スポーツに関わる選手およびアントラージュを対象にしたインタビュー調査は 6 名に対して実施した。

【2】競技団体による、アスリート・アントラージュの課題に関するディスカッションの実施

「アスリートの育成環境の改善に向けたフォーラム」にてプログラムとして位置づけた競技団体によるディスカッションを、テーマ別に複数回開催した。アスリートファーストの再認識を促すテーマや、エージェントやアンチ・ドーピング、反社会勢力に関するテーマを扱い、アントラージュに関する理解を競技団体に深めてもらえるようにディスカッションを実施した。

【3】アスリート・アントラージュに向けた教育プログラムの調査

アントラージュに向けた教育教材を作成するにあたり、諸外国のアントラージュ教育プログラム先進事例調査を実施した。また、IOC アントラージュ委員会と情報交換を重ね、現状の把握と情報収集を実施した。

【4】アスリート・アントラージュに向けた教育プログラムの開発

昨年度の本事業で得られた知見、および本年度の本事業で得られた知見に基づき、アスリート・アントラージュに向けた、アントラージュが理解しておくべき役割や行動に関する教育プログラムを開発した。教育プログラムは、できるだけ多くの人々活用していただけるよう、興味を持たれやすい映像教材を含むこと、ホームページ等を通じて公開できることなどを主要な要件とした。

教育プログラムはコーチ向け（3 時間程度での実施を想定）、保護者向け（2 時間程度での実施を想定）の 2 種類があり、ファシリテーターガイド、映像教材、受講者用ワークシート、受講者用参照資料が用意されている。それぞれ完成度を確認するための試行もおこなった。

3 事業の結果

【1】パラリンピック競技種目選手に潜在する、 選手の成長を阻害する要因についての調査

平成 26 年度「アスリート・アントラージュの連携協力推進」事業にて実施されたアスリート・アントラージュの課題把握調査をうけ、本年度はパラリンピック競技種目選手に潜在する、選手の成長を阻害する要因についての調査を、アスリート・アントラージュワーキンググループにて実施した。

① 障害者スポーツの種類と支援のあり方

障害者スポーツにおいて、競技者、選手への支援内容、支援方法、支援者のあり方は、一般のスポーツ環境と大きく変わることはない。しかし、パラリンピック等のエリートスポーツの世界で活躍する競技者であっても「障害」があるが故に「できない」こと、「支援が必要」なことがある。また、競技規則の中でも競技者を支援する者が一緒に競技へ参加することが認められているものもある。

いくつかの障害者スポーツ独自の「支える者」を例として以下に示す。

■ 障害の種類と国際大会

	障害(1)	障害(2)		国際大会の種類
障害者	身体障害	視覚障害		パラリンピック
		肢体不自由	機能障害	パラリンピック
			頸髄損傷	パラリンピック
			脊髄損傷	パラリンピック
			切 断	パラリンピック
			脳性麻痺	パラリンピック
		聴覚障害		デフリンピック
		内部障害		無 し
	知的障害			パラリンピック グローバル大会 スペシャルオリンピックス
	精神障害			無 し
臓器移植者			臓器移植者大会	

■支援のあり方／障害を補う（競技中以外を含む）支援

障害		障害の特徴	支援内容
身体障害	肢体不自由 ・ 脊髄損傷 ・ 脳性まひ ・ 切断 等	・ 手足等に機能障害がある ・ 車椅子や杖を使用する場合もある	・ 移動時のサポート ・ 車椅子のメンテナンスサポート（メカニック） ・ 義足のメンテナンスサポート（義肢装具士） ・ 特殊な競技用具のメンテナンスサポート
	視覚障害（視野障害）	・ 見えない ・ 見えにくい	・ 移動時のサポート ・ 環境の口頭説明 等
	聴覚障害	・ 音が聞こえない ・ 音が聞こえにくい ・ ことばが話せない	・ 手話通訳 ・ 要約筆記
知的障害	知的障害	・ 言葉による意味理解が難しい場合がある ・ ルール理解が難しい場合がある 等	・ 分かりやすい言葉による説明 ・ 移動時のサポート ・ 理解が難しいことに対する必要に応じたサポート

■その他のすべてに共通する支援

- 障害、身体に対するメディカルチェック、医療面での支援（医師、PT、OT 等の医療従事者）
- コンディショニングサポート（トレーナー等）

■その他の障害（精神障害や身体障害（内部障害※心臓疾患や呼吸器疾患の方等））

■支援のあり方／競技中の支援

競技	役割	支援内容	障害
陸上競技	①ガイドランナー ②コーラー（音源）	①目の見えない選手の伴走 ②目の見えない選手に対して声、音による方向指示	視覚障害（視野障害）
自転車	①パイロット	①目の見えない選手と一緒に乗車（タンデム）	視覚障害（視野障害）
アーチェリー	①介助	①矢をつがえる補助（手指に障害のある選手支援）	肢体不自由 ①手足が十分に使えない
水泳	①タッパー ②入水、退水の介助	①目の見えない選手の折り返し等でのタッピング指示 ②足が悪い選手、座った姿勢が保てない選手の入退水サポート	①視覚障害（視野障害） ②肢体不自由 ※手足が十分に使えない（最重度）
ボッチャ	①アシスタント（BC3） ②介助（BC1）	①ランプ（補助具）使用者の補助具操作等の競技アシスタント ②ボールを拾うことが出来ない選手へのサポート	肢体不自由 ①手足が十分に使えない（最重度）

② 調査概要

障害者スポーツにおけるアスリート・アントラージュに関わる課題を把握するため、障害者スポーツに関わる選手およびアントラージュを対象にしたインタビュー調査を実施した。対象をコーチ、保護者、義肢装具士、選手とし、半構造化面接法（*注）によって面談を実施した。

*注 半構造化面接法：あらかじめ仮説を設定し質問項目も決めておくが、会話の流れに応じ質問の変更をおこない、自由な反応を引き出す面接法

本調査では、以下のカテゴリー該当者にインタビューを実施した。

No.	対象者	競 技	取材日	備 考
1	井上 明浩 (コーチ)	陸上長距離 (知的障害)	2015 9/3	知的障害者陸上クラブ「春風クラブ」代表監督
2	岩佐 義明 (コーチ)	車椅子バスケット	2016 2/2	「宮城 MAX」ヘッドコーチ、ロンドンパラリンピック日本代表ヘッドコーチ
3	臼井 二美男 (義肢装具士)	陸上(切断)	2015 9/24	切断障害者陸上クラブ「Health Angels」主催者
4	原田 文子 (保護者)	陸上長距離 (知的障害)	2015 9/3	シドニーパラリンピック日本代表原田歩の母
5	豊島 英 (選手)	車椅子バスケット	2016 2/2	ロンドンパラリンピック日本代表
6	鈴木 徹 (選手)	陸上走り高跳び (切断)	2016 2/10	シドニー、アテネ、北京、ロンドンパラリンピック日本代表

③ 調査結果

以下はインタビューで得られた障害者アスリート・アントラージュに関わる課題の抜粋である。

<経歴>

養護学校にて、部活動としての知的障害者の陸上部を作る。その後、その陸上部 OB を受け入れるためのクラブを立ち上げ、現在は知的障害者だけでなく、聴覚障害、視覚障害、身体障害など様々な障害者も受け入れて活動を行っている。



■ 障害者スポーツ活動に必要な支援者

健常者スポーツと同じように、技術指導ができるヘッドコーチ、その活動をサポートするアシスタントコーチが必要。他に知的障害の場合は、選手のサポートをするスタッフが必要となる。選手は誰かが言わなければ着替えないし汗も拭かない。着替えの手伝いや靴紐を結ぶなど、スポーツをする状態にもっていくためのサポートをする人が必ず必要となる。陸上競技の理想としては、一緒に横で走るガイドランナーがいると、より効果的な練習が可能になる。現在、練習パートナーや選手サポートスタッフはボランティアにお願いしているので、それらの方の都合によってスタッフがいなくてもある。そのような状況を改善するため、総合型地域スポーツクラブと共同で、若手の有償ボランティア育成に取り組んでおり、スタッフが常時練習に参加できる様なしくみをつくっている。

知的障害者の場合、進学や就職など選手自身の転機を競技指導者が把握し、場合によってはアドバイスすることが、長く競技を続けるためには必要である。知的障害者は自分から進路を相談したり報告するようなことはないが、就職により、競技の練習と仕事の両立が困難になってしまう場合もあるからだ。それを防ぐために指導者は、障害者に近い関係者である保護者や養護施設職員と、進学や就職のような個人情報共有できる関係性を築いておく必要がある。

■ 障害者スポーツの環境

障害者スポーツは、良い指導者がいれば生涯のロングライフのスポーツにつながっていくと思う。そのためにも指導者が障害者スポーツの指導で生活できるようになると思う。良い指導者がいればスポーツは楽しいし、障害者本人だけでなく、周囲の関係者にも、スポーツで何かを達成する喜びを与えることができる。

また、少しずつ改善してきてはいるが、海外遠征の費用負担が大きい。特定の大会には補助があるが、日本代表になっても経済的に余裕がある人でなければ世界に出て

行くことはできない。

知的障害者は練習場や大会会場への送迎が必ず必要になるため、保護者など送迎できる人がいなければスポーツに参加することもできない。

■ 指導者の育成

現在指導者の育成も手がけている。中には、私よりさらに年上の指導者の方も含まれている。障害者スポーツを地域スポーツとしてやっているのに、5年後10年後に、指導者がいなくなってしまうのも困る。障害者スポーツ指導者には、スポーツを楽しませる意識がとても重要。楽しくなければ、障害者は指導者の言うことに興味を示さなくなるし、すぐにスポーツをやめてしまう。スポーツ指導の本質を学ぶために、障害者スポーツ指導の体験は有効だと思う。

我々よりも上の年代の保護者の方には、スポーツは福祉のサービスだからただ「受け取るもの」という感覚があり、お金を払ってまではやらないという意識があった。今では小学生向けの、有料の陸上教室が成り立つような状況になってきたので、指導者に謝礼を支払うこともできるようになると思う。障害のある子の家庭からの理解を得ることができれば、総合型地域スポーツクラブなどに、有償のコーチを配置することができると思う。そのような環境づくりが大切だと思っている。

No.2 | 岩佐 義明 | 男子車椅子バスケットボール指導者

<経歴>

中学校でバスケットボールの指導を行った後、障害者スポーツセンターで車椅子バスケットボールの指導を始めた。25年間車椅子バスケットボールの指導を行っている。



■ 障害者スポーツ活動に必要な支援者

チームメンバーの保護者の皆さんは、大きな試合になると必ず見に来てくれる。そこで初めて会う方もいるが、皆さん、熱心に応援してくれている。普段の練習まで見に来る方は少ない。しかし、車の免許をもっていない選手の場合は保護者が練習の送り迎えをしているので、そのようなときに見学される方もいる。

■ 障害者スポーツの環境

我々のチームには遠くから通ってきている選手もいる。車があっても移動が長いと仕

事との両立が難しくなるため、定期的に私の家に泊まって、練習に通う選手もいた。

我々のチームは社会人が中心で、アスリート雇用の選手や、正社員として仕事を持ちながらバスケットを続けている選手がほとんど。しかしチームによっては仕事を探すのが難しい地域もあるので、経済的理由で競技をやめてしまう選手もいる。

車椅子バスケットでも公共の体育館の利用はできるが、混み合っていて枠がとれないことが多く、練習場の確保に苦勞しているチームも多い。また、公共の施設であっても利用料は必要なので、スポンサーのついていないチームは、こういった練習費用の工面に苦勞している。

■ 車椅子バスケットの指導環境

車椅子バスケットの選手には2つのパターンがある。障害を持つ前にバスケットボールをやっていたが、障害を持ったことで車椅子バスケットに転向してきた選手と、生まれつき障害があり、初めてのバスケットボールが車椅子の選手のパターンである。当然、必要なトレーニングは一樣ではない。車椅子バスケットの場合、車椅子をこぐスキルとバスケットボールのスキルが求められる。さらに車椅子バスケット独特のプレイスタイルも存在する。

私たちのチームでは、車椅子バスケットボールであっても健常者バスケットボールのプレイスタイルも導入したいと考えているため、そのスタイルに沿った判断力、思考力も鍛えたい。そのために、健常者バスケットボール講習会にも参加し、指導方法を学んでいる。

■ 指導者の育成

指導者の世代交代も意識している。現在チームに所属する選手のひとりを将来は監督にしたいと考えており、練習メニューの作成はある程度任せる様にしている。また、チーム作りを指導者の一存で進めるのではなく、選手の意見を取り取り入れることも重要だと思っている。私のチームでは、車椅子バスケットボールを通じて、社会人としても活躍できるような選手を育成していきたいと思っている。障害者スポーツを通じて、社会でも認められるような人間になってほしいと思う。

<経歴>

生活用義足を作るサポートセンターに勤務する義肢装具士。スポーツ用義肢装具士でもあり、スポーツ用義足の製作からパラリンピック大会等に同行してそのメンテナンスも行う。義足陸上チームを主催し、義足使用者がスポーツをする場の提供も行っている。



■ 障害者スポーツ活動に必要な支援者

2020年の東京パラリンピック開催の影響もあり、日本パラリンピック委員会のスポンサーも増えてきているし、サポートセンターに最近は商工会議所や企業が見学にくるようになった。

スポーツ用車椅子や義足は、ありさえすれば機能するというものではない。障害者スポーツに興味がある若い人や、保護者の方に体験してもらえる、見てもらえる機会はとても大切だと思う。学校や施設にいる人はまだいいが、障害を持ちながら家で暮らしているは、保護者に頼らないと情報を得たり移動をすることができない。そのような人に、どのようにして障害者スポーツの情報を届けることができるかが、障害者スポーツの普及に影響してくると思う。

トレーニングのウォーミングアップなどは、理学療法士にお願いしている。選手のレベルが上がると、練習コーチは陸連の方をお願いしていた。私はその横で義足の調整をしている。パーソナルコーチ、義肢装具士、ドクター、代表の陸上コーチがお互いの専門性を認め合い、助け合う関係性が今は出来ている。

障害者スポーツは危険なところがあり、健常な脚を怪我することもある。健常者は片足を痛めてもさほど日常生活に困らないが、そもそも片足に障害を持つ人が健常な足を痛めると、とても困ったことになる場合がある。そのために、欠損の人に限らずまひの人にも、疲労骨折に対するケアや、その他の怪我を防ぐための身体のケアが重要になる。自己管理も重要だし、医療的ケアで支援することも必要。

■ 障害者スポーツの環境

障害者スポーツに本格的に取り組もうと思ったら、スポーツ用義足を購入するために50万以上のお金が必要になる。生活用の義足ではないため、国の助成の対象ではない。生活用義足の一部を付け替えて流用することはできるが、トップレベルを目指

すアスリートとなるとスポーツ用義足が2セットは必要になる。

個人がいきなりそれを購入することは難しいので、スポーツ用義足を試してもらうために、ここで所有しているものを一定期間貸し出すことを行っている。しかしスポーツ用義足の貸出や体験できる場所は、全国でもまだ少ないと思う。競技団体のような組織がスポーツ用義足を購入して所有し、それを地域の人たちに貸出しするシステムができると良いと思う。そのような仕組みのために、国の助成が活かされると良い。個人に提供しようとする、本当に必要な人に行き渡らなくなると思う。

障害者スポーツセンターもまだ少ない。県によっては1箇所しかなく、そこを中心に半径20～30キロ以内ぐらいの人しか利用することができない。やはり障害者スポーツ施設はたくさんあったほうが良いと思う。

■ 指導者の育成

若い人装具士が見学にきたり、理学療法士が来たり、ここ1～2年の間でこの仕事に興味をもつ人が増えてきている。東京でのパラリンピック開催が近いこともあり、さまざまな形で障害を持った人にもスポーツを、という世の中の潮流を感じている。

若手の障害者スポーツコーチも育成しなければならない。義足陸上チームでは、健常者チームの練習と一緒に練習して、そのコーチに指導してもらう機会もつくっている。義足ランナーを、どのように指導すればよいかわからないコーチも当然いるが、義足だからと特別に考えず、健常者に対するのと同じように指導すればよいという共通理解ができつつあるようだ。

No.4 | 原 田 文 子 | 知的障害陸上長距離競技者の母

< 選手の経歴 >

原田歩さん。16歳から養護学校で陸上をはじめる。19歳で日本代表に選出され、22歳でシドニーパラリンピックに出場。知的障害者陸上中長距離の日本記録保持者。

■ 子供がスポーツをはじめたきっかけ

担任の先生から誘っていただき、養護学校の高等部に入ってから陸上をはじめた。スポーツをしているほうが家でダラダラしているよりいいのではないかと、また太っていたので走ったら痩せるのではないかと、と思って陸上をやらせてみることにした。最初から陸上にのめりこんだ様子ではなかったが、普通に練習に参加していた。高等部を卒業して、監督が大学生と一緒に走れるようにしてくださったころから、記録が伸びていった。

■ 保護者としてのかわり

高校を卒業してからは仕事をしながら練習をしていた。仕事を終えてから毎日2時間は練習していたので、体力的には大変だったと思う。つらくなっても自分からは言わないので、感じてあげる、察してあげる、そこは気をつけてあげないといけないと思っている。怪我をしても本人は「痛い」とは言わない。「痛いならやめときなさい」と言っても「大丈夫だ」って練習に行こうとする。走り方がおかしいとか、引きずっているとか、ちょっとフォームがおかしい、と思ったら「痛いのではないか」と注意して見守っている。

高校1年生で陸上をはじめたとき、私は車の運転が出来なかった。しかし競技場はどこも遠くて車がないといけないところばかり。養護学校も遠かったこともあり、一念発起して50才過ぎてから免許をとって競技場への送り迎えをしていた。遠征費など費用はかかったが、幸いにも負担できる範囲に収まっていたので続けることができた。

他の保護者の方々を見ると、熱心にサポートしているご家庭の場合は選手も長くスポーツと付き合っていることが多いと思う。保護者が熱心でないと、だんだんと競技場で見かけなくなってしまう。保護者のバックアップがないと子供はスポーツを続けられないので、やはり保護者の関わりがいちばん大事なのだと思う。

■ 仕事との両立

仕事との両立が大変になり、競技をやめていく人もいる。どの家庭もそうだろうが、もちろん仕事を優先せざるを得ない。一緒にシドニーに行った保護者の方で、ここを最後にもう陸上をやめさせる、という保護者もいた。いろいろな意味で、競技を続けるのは簡単ではない。

■ 関係者との連携

学校の先生と、陸上のコーチと、保護者と、選手のまわりにいる多くの人たちが、コミュニケーションをとって連携していくことが必要だと思う。どれか欠けてもうまくいかない。

<経歴>

生後4カ月で髄膜炎を患い、両脚が不自由となって車椅子生活となる。中学生の時に車椅子バスケットボールを始める。2009年にチームを移籍、2010年に日本代表入、2012年ロンドンパラリンピック出場、2014年アジアパラ競技大会準優勝。



■ 車椅子バスケットをはじめたきっかけ

中学生のとき、体育の先生が車椅子バスケットの講習会があると教えてくれて、それに参加したのがきっかけ。チームの練習場所が自宅から遠く、土日に親に送ってもらい練習に通っていた。途中からは近くのチームメイトと一緒に通うようになり、練習回数も増えた。昼間は学校に行き、夜は練習に行っていた。社会人のチームだったので、チームメイトと比べボールは飛ばないし、筋力の差もあるので最初は大変だった。若い選手は自分しかいなかったため、自由にやっていいと、のびのびやらせてもらった。試合にも出してもらい、経験を積むこともできた。

■ 支援者

免許がないうちは自分で移動できないので、送り迎えで家族やチームメイトにはとてもお世話になった。地元の体育館で練習するときには友人が体育館で練習につきあってくれ、感謝している。その後チームを移籍して練習場所が遠くなったが、自宅と練習場の間に監督の家があり、練習の帰りに監督の家で夕飯を食べさせてもらったり、宿泊させてもらったりしていたので、とても助かった。

試合などで仕事を休んだときには職場の人が代わりに対応してくれているし、家族にも支えられている。

■ スポーツ環境

競技を始めて間もないころは送り迎えに頼るしかないので、家族の都合で土日しか練習に参加できなかった。高校の途中からはチームメイトに送り迎えしてもらえるようになり、平日も練習できるようになった。

最初のチームでは指導者はいなく、選手兼監督を中心に選手同士ですべてを決めていた。選手同士で指導しあったり、ベテランが練習メニューを提案したりしていた。選手権に出場するために監督として登録をしていたが、実際の指導者ということ

ではなかった。

移籍したチームは日本でもっとも強く、海外で活躍する選手も在籍する素晴らしいチーム。練習仲間はレベルが高く指導者もいて、競技者として成長するのにもっとも良い環境になった。

■ 仕事との両立

最初のチームは全国ではそんなに強いチームではなかった。しかし日本代表になりたかったので、高校3年の進学のと同時に移籍も考えていたが、就職が地元で決まったので、移籍は難しいと考えそのままのチームでプレイを続けた。競技者としての成長を望みつつも、現実としては仕事を優先せざるを得なかった。社会人になって車の運転もできるようになり、生活リズムもつかめてきたこともあり、チーム移籍を考えるようになった。

最初に地元で就職した会社では、フレックス勤務を使いながら平日の練習にも参加でき、移籍した仙台の練習にも参加できた。また、試合のための遠征も認めてもらっていた。2009年にチーム移籍してから練習場所は遠くなったが、震災があった2011年までは自宅から通っていた。帰宅は深夜でも早朝から仕事があったので、通うことよりも休養がとれなかったことの方がつらかった。当時は週5日、朝から晩まで働くスタイルが多かった中で、みんなやりくりしながら練習や試合に参加していたので、これが当たり前なんだな、と思ってやっていた。震災の後、転職してチームがある仙台で働くようになった。去年の4月からは別の会社でアスリート採用で転職したので環境がガラッとかわり、今まで以上にバスケットに専念できるようになった。チームにいたメンバーがアスリート採用で転職したので、その仲介者を紹介してもらって、いくつかあった提示先の中からいまの会社を選んだ。

■ 地元とのかかわり

去年の4月から、地域の学校やイベントに行き、講演などをするようになった。障害者スポーツでがんばっているということを紹介したり、1つのスポーツとして車椅子バスケットボールを紹介したいなど、趣旨は様々にある。自分としては車椅子バスケットボールの普及に貢献したいし、また、子供たちにはいろんなことにチャレンジしてもらいたいので、そういうきっかけになればいいと思っている。

震災前は、あたりまえのように好きな車椅子バスケットをやっていた。自分が満足するためにやっていて、周りのことまでは考えていなかった。しかし震災で、特に障害者なので一人では何もできないことがわかった。いろんな選手が職場や周りのひとに恩返ししたい、と考えてプレイするようになったということが、震災後に変化した点だと思う。単に楽しい活動から、いろんな人の思いを背負ってプレイする意識に変

わったように思う。講演をするときも自分たちがやることによって勇気や元気を感じてもらえたらうれしいし、地域や日本全体が明るくなるといいと思うようになった。

No.6 | 鈴木 徹 | 切断高跳び選手

<経歴>

中学、高校時代はハンドボール選手として活躍していたが、事故により片足切断をして義足になった。義足のリハビリ中の義肢装具士との出会いがきっかけとなり、走り高跳びを始める。シドニー、アテネ、北京、ロンドンパラリンピックに出場し、4大会連続入賞。2007年IWAS世界大会では金メダルを獲得。



■ 陸上をはじめたきっかけ

1999年2月に自動車事故を起こし、片足切断をして義足になった。リハビリ訓練の中、義肢装具士さんの紹介で陸上競技を知った。事故前から日本代表選手になりたいというのが自分の中にあっただけで、障害者は劣っているというイメージを持っていたにも関わらず、パラリンピック陸上競技をひと目見て、強いあこがれを持ったことが背中を押し、競技をはじめた。事故から1年後に高飛びで日本記録をだせたこともあり、陸上パラの世界でやろうと決めた。

■ 支援者

シドニーパラリンピックでは、義肢装具士がいてくれたことが大きかった。まだ、切断箇所には痛みや傷があったが、前日まで義肢を調整してくれて安心できた。当時は海外遠征の際の基本的な選手支援も不足していた。スタッフも不足していて、私たち選手が視覚障害者の生活支援をするほどだった。慣れない作業と自分の調整時間不足で疲れてしまい、試合どころではなかったと思う。いまはスタッフも増えているのでそのようなことはなくなった。

■ スポーツ環境

車椅子、目の障害の人は、トレーニングルームや競技場の使える環境が制限されてしまったり、一般の大会に出場できないこともある。自分はバリアフリーでなくても義足なので不便さは感じないし、一般の競技会に出ることも可能である。障害者のな

かで義足は、恵まれた環境にあると思う。

義足の人が競技者になるまでには、乗り越えなくてはならない壁がある。TVなどで競技を見て知っても、地方の人は地元でスポーツ義足を入手することは難しい。それが入手できる東京や大阪に行くことも簡単ではない。

義足選手のためのスポーツクラブもまだ少ない。陸上クラブ Health Angel ではいろんな人が義足をつけていて、義肢装具士さんや PT さんもいる。このようなクラブが全国にあれば良いと思う。毎週でなくても 2 週に 1 回、月に 1 回でもいいので、こういった取り組みを広げることが大事だと思う。そこに企業や自治体が協力して情報ネットワークが確立されれば、タレント発掘も進むのではないかと思う。

■ 仕事との両立

シドニー、アテネ、北京、ロンドンと出場した。大学卒業後、就職せずに大学に聴講生として残り、アテネを目指した。その後、プロ選手を目指してスポンサー活動をした。100 社ぐらいに電話や営業をして、3 社から資金や物品の提供スポンサーになってもらった。同時に講演活動をはじめた。2004 年からは代理店をつけ、今は年間 20-30 回ぐらい講演をしている。セカンドキャリアを考えて、大学のハンドボール部の監督を引き受けた時期もあった。アスリート雇用は選手を続けるにあたり、資金的に大きな転機だった。現職では給与 + 遠征費の補助もある。別会社からはウェア提供をつづけてもらっている。

活動資金を捻出するのに精一杯で、競技優先でできなかった時期があった。自分のこだわりでプロだから会社に入ってはいけないと思っていたので、アルバイトをして生活をつないだ。海外大会はパラリンピックとアジア大会にしか支援が出なかったもので、遠征費の捻出が大変だった。

仕事や日常生活の両立が難しい状況もあるが、最近ではアスリート雇用が増えている。障害者雇用は進んでいると思うが、もっとアスリート雇用で雇っていただけるといいと思う。

■ 望むサポート内容

パラのメンバーからすると、普通に JISS や NTC を使えることが一番うれしい。協会を通して申しこむ、となるとだんだん使わなくなってくる。JISS でデータ分析をしてもらい、生の情報を持ち帰って練習し、また分析してもらおうというように、施設をオリンピック選手と同じように使いたい。必要なときにデータ分析してもらってフィードバックがあれば、本当に役立つと思う。陸上競技場に行けばオリンピックもいて、いろんな情報交換ができる。障害者専用の施設ではなくオリンピックと同じ場所を強化選手、代表選手として使わせてもらえることが希望。普通以上のことをされ

ると甘えがでてしまうと思う。

障害者にも様々ある、ということを、より知ってもらいたい。重度の障害者だけでなく、僕らのようにパラリンピックに参加する軽度の障害者もいることを。北京オリンピックの前までパラリンピックはまだ認知度が低く、福祉や障害者のリハビリのための大会のように理解されていた。それ以降、パラ陸上のスター選手や、車椅子バスケのマンガなど様々な情報が出てきたことや、今回、東京オリンピック・パラリンピックという大会名が使われたことも大きいと思う。こういったことの相互作用で、今はずいぶんと理解が進み、サポートも進んだと思う。

④ 障害者スポーツにおけるアスリート・アントラージュの課題

今回の調査により、障害者スポーツにおけるアスリート・アントラージュの課題として以下のことがあげられた。

1. 障害者スポーツ指導者の不足

障害者スポーツの専門指導者が不足している。育成の試みは進みつつあるが、指導方法もまだ確立されていない。また、障害者アスリートが有償で指導を受けることへの理解が十分でなく、有償のコーチを配置する仕組みづくりが進まないことも、指導者不足の一因である。

2. 障害者スポーツサポートの不足

障害の種類によっては、たとえば視覚障害や知的障害の場合、スポーツをする状態を維持するためのサポートが必須になる。この場合、スタッフが揃っていないと障害者は競技会参加や練習ができない。また、練習場や競技会会場への送迎が必要な場合が多く、保護者など送迎できる支援者がいなければ、障害者はスポーツに参加することができない。

3. 健常者向けスポーツ施設の利用

国立スポーツ科学センターやナショナルトレーニングセンターのようなスポーツ施設を、もっと手軽に利用できるようになることを望む声がある。現在のところ利用のための手続きに煩雑さがある。障害者専用施設を新たに作るよりも、健常者アスリートとの交流や情報交換を含め、現存の施設を健常者と同じように利用することが望まれている。

また、現在のところパラリンピックを目指すようなアスリートになる以前の段階、つまりスポーツに接する時点での課題が以下のようにあげられる。

4. 障害者スポーツと「出会える場」の不足

障害者スポーツを知る、試してみる機会が極めて限られている。競技者のレベルをあげていくために競技者の増加させることは重要な要因であるが、そのためにはまず、障害者や障害者を取りまく関係者にスポーツの存在を知ってもらい、興味を持ってもらう必要がある。そのような情報を、どのように幅広く届けていくかは大きな課題である。

5. 障害者スポーツを「する場」の不足

障害者が、障害者スポーツの存在を知っていても、スポーツに参加できる場がまだ少ない。たとえば障害者スポーツセンターは県によっては1箇所しかない。障害者は移動が困難な場合が少なくないので、自宅から至近の距離に施設がなければ、スポーツに参加することが難しい。

以下は、健常者、障害者に共通する課題である。

6. 仕事との両立

競技のレベルが上がるに連れ、必要なトレーニングの質も量も上がるのは健常者も障害者も同じである。競技者としての環境を維持するためには、生活費の他にトレーニングや遠征の費用を工面する必要がある、通常は仕事を通じてそれらを得ることになる。その仕事のための時間と、トレーニングのための時間の両方を確保することが困難になる。近年は「アスリート雇用」が障害者スポーツの中で見られるようになった。生活やトレーニングに必要な費用を給与として受け取りながら、トレーニングの時間を十分に確保できる雇用形態で、その対象となったアスリートには好意的に受け止められている。

【2】アスリート・アントラージュに向けた教育プログラムの開発

本年度の事業の目的のひとつは、国際オリンピック委員会アントラージュコミッティーの協力を得ながら、アスリート・アントラージュの概念を周知するためのプログラムを開発すること、そして、諸外国のアントラージュに向けた教育プログラムの先進事例を調査し、日本の実情に即したプログラムを開発、試行、検証することであった。以下に本年度実施した内容について報告する。

① プログラム開発(1)

「アスリートの育成環境の改善に向けたフォーラム」にて、競技団体によるディスカッションをプログラムとして位置づけ、テーマ別に複数回開催した。

「アスリートの育成環境の改善に向けたフォーラム」はJOC アントラージュ専門部会とアスリート・アントラージュワーキンググループにて以下のように開催した。

ただし、第3回については、3専門部会合同の「総務委員会フォーラム」として実施した。

日 時	内 容
10月27日(火) 13:00～17:00	第1回「アスリートの育成環境の改善に向けたフォーラム」 第1部:アスリート委員会設置について (JOCアスリート専門部会・JOCアントラージュ専門部会合同フォーラム) 第2部:代表選手選考の基準と選手への伝達について (JOC強化部・JOCアントラージュ専門部会合同フォーラム)
12月24日(木) 13:00～16:00	第2回「アスリートの育成環境の改善に向けたフォーラム」 テーマ1:アントラージュに関するガイドライン テーマ2:エージェント(代理人)とのかかわり方 テーマ3:「アンチ・ドーピング」とのかかわり方
2月22日(月) 15:10～17:00	平成27年度「総務委員会フォーラム」(3専門部会合同のフォーラム) テーマ1:スポーツ庁委託事業実施報告「アントラージュフォーラム」 テーマ2:あらゆるリスクに関する情報提供 警視庁・警察庁との連携について テーマ3:アントラージュ向け教育プログラム(教材)について

各回のフォーラム内容を以下に報告する。

第1回「アスリートの育成環境の改善に向けたフォーラム」

【テ ー マ】 第1部：アスリート委員会設置について

(JOC アスリート専門部会・JOC アントラージュ専門部会合同フォーラム)

第2部：代表選手選考の基準と選手への伝達について

(JOC 強化部・JOC アントラージュ専門部会合同フォーラム)

【日 時】 平成27年10月27日(火) 13:00～17:00

【場 所】 味の素ナショナルトレーニングセンター 大研修室

【参加者数】 国内競技団体(NF)に担当者を中心に54団体86名

本フォーラムは2部構成で行われた。第1部ではJOC アスリート専門部会・JOC アントラージュ専門部会合同でNF アスリート委員会設置について、第2部ではJOC 強化部・JOC アントラージュ専門部会合同で、代表選手選考の基準と選手への伝達についてのプログラムを実施した。

フォーラム開始に先立ち、あいさつを行った平岡英介 JOC 専務理事は「スポーツの持つ力を国民と共有しながら、2020年に向けて気運を醸成し、選手を取り巻く環境の整備につなげていきたい」と述べ、アスリートのサポートに取り組む重要性を訴えた。



平成27年度 第1回
JOCアントラージュフォーラム

■アスリートファーストの環境づくりの重要性

第1部ではアスリートとNFとの理想の関係性作りをテーマに、2団体のアスリート委員会設立の事例紹介とグループディスカッションが行われた。

冒頭に、荒木田裕子 JOC アスリート専門部会副部長が、各NFでのアスリート委員会設置状況と、アスリート委員会設立の意義について説明を行い、続いて高橋尚子 JOC アントラージュ専門部長が「NFの具体的な事例を参考に、アスリート委員会のしくみや設置の意義、アントラージュとアスリートの関連性の深さとアスリートファーストの環境づくりの重要性について理解を深めていただきたい」と述べ、アスリート委員会設置の重要性を訴えた。



アスリート委員会の重要性を訴える
荒木田JOCアスリート専門部会副部長

アスリート委員会設立事例紹介として、はじめに日本トライアスロン連合の大塚眞一郎専務理事と山本良介アスリート委員会委員長が、アスリート委員会設置の経緯と取組を報告した。大塚専務と山本委員長はNFと選手との意見交換できる場があることでそれぞれが得られるメリットをあげ、大会運営にアスリートの意見を取り入れる、アスリートが競技について学ぶ環境を作るなど、具体的な事例を紹介した。

続いて日本水泳連盟の伊藤華英アスリート委員が、昨年設立されたアスリート委員会の設立経緯と取組を報告した。具体的な活動事例として、国際競技連盟（IF）アスリート委員会へ向けた意見集約と会議内容の共有、選手や指導者に向けた啓蒙冊子の作成などを紹介、今後はNFと協力してアスリートファーストのよりよい環境づくりを目的として活動をしていきたいと報告した。

2団体の事例紹介を受けたグループディスカッションでは、8つのチームに分かれて「NFとwin-winの関係を作る、NFアスリート委員会の役割と組織」をテーマに意見交換を行った。参加者は自身が所属するNFのアスリート委員会設置状況や活動について紹介するとともに、他団体の状況や取り組みを聞き、アスリート委員会をどのような目的で設置をするのか、またどのような活動がされていくべきかを熱心に議論した。発表では「アスリートとNFが信頼関係を築くことの重要性」や「アスリート委員会設立趣旨を明確にする必要がある」といった意見をはじめ、アスリート委員会を建設的な意見交換や情報共有の場として活用するため、アスリートへの指導やメンバー構成の検討など、設立や活動に関して具体的な意見が提示された。

■選手選考はどうあるべきか？

第2部では「選手選考の透明化に向けた取組み」をテーマに4団体の事例報告とグループディスカッションが行われた。最初に、高橋アントラージュ専門部会長が、前回のフォーラムで「透明性のある選考」に関する意見が多くあげられたことを受けて本テーマを設定したと説明。続いて岩上祐子JOC強化部部長代理が、選手選考に関する情報公開の重要性とその影響について説明し、「本フォーラムで各NFの事例を共有することで、課題等の解決方法をみつけていただきたい」と述べた。



選考の透明性について説明する高橋尚子
JOCアントラージュ専門部会長

次に、全日本柔道連盟木村昌彦強化副委員長が、同連盟で採用している選考方法の説明を行い、選手選考の場をマスコミに公開したことや選考基準を公式ホームページ

に掲載しているなどの事例を具体的に紹介した。次に、全日本バレーボール協会荒木田裕子強化事業本部長が、チーム競技の代表選手選考方法の一例として、選考から外れた選手に対するケア内容、そして代表チームと選手の所属チームとの連携に関する報告をした。続いて、日本セーリング連盟鈴木國央オリンピック強化委員会委員が、選考に関するトラブル回避のため選手選考基準を明文化した事例を報告した。最後に、日本体操協会立花泰則マルチサポート委員会委員長が、同協会の選手選考の方法とその目的について報告、選考基準を明文化することのメリットを説明した。

4団体の事例紹介を受けてのグループディスカッションは、競技特性や選考方法に基づいた8グループに分かれて「選手の納得性を高める、選考基準の項目と情報伝達」及び「代表選考から漏れた選手へのサポート」をテーマに意見交換を行った。グループ内で各NFでの選手選考方法を共有、そのメリットや課題など活発に議論した。それぞれの競技特性を踏まえた事例や、「選考の基準や結果を公表することの重要性」「一度の選考会で決められない」という課題など、多くの意見が上がったほか、「選考の透明化を行うことこそ選手へのサポートにつながるのではないか」という意見も示された。

高橋アントラージュ専門部会長と荒木田アスリート専門部会副部会長による総括の後、最後に齋藤JOCアントラージュ専門部会副部会長があいさつに立ち、「アスリートとNFが同じ方向を向いて進んでいかななくてはならない。若いアスリートにも積極的に意見を出してもらえよう、アスリート委員会を活用してほしい。今後ともアスリートファーストを重視し、JOC、アスリート専門部会、アントラージュ専門部会としてもサポートしていきたい」と述べ、フォーラムを締めくくった。

第2回「アスリートの育成環境の改善に向けたフォーラム」

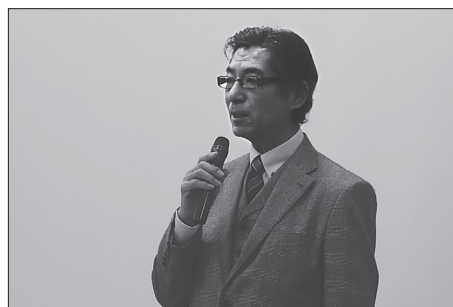
- 【テーマ】 テーマ1：アントラージュに関するガイドライン
 テーマ2：エージェント（代理人）とのかかわり方
 テーマ3：「アンチ・ドーピング」とのかかわり方
- 【日時】 平成27年12月24日(木) 13:00～16:00
- 【場所】 岸記念体育会館1階 101、102、103 会議室
- 【参加者数】 国内競技団体(NF)に担当者を中心に 48 団体 79 名

本フォーラムは3つのテーマ構成で行われた。テーマ1はアントラージュに関するガイドラインについて、テーマ2はエージェント（代理人）とのかかわり方について、テーマ3はアンチ・ドーピングとのかかわり方について、のプログラムを実施した。

フォーラム開会のあいさつを行った平岡英介 JOC 専務理事は「選手をとりまく環境を整備していくのがアントラージュ部会である。本日のフォーラムでスポーツの持つ力、高潔さを改めて理解いただき、みなさんとスポーツの高潔さを推し進めたい」と述べ、アスリートサポートへの理解を促した。続いて高橋尚子 JOC アントラージュ専門部会長が、アントラージュガイドラインの理解と代理人やアンチ・ドーピングについての再認識をテーマとしている旨を説明。「来年のリオデジャネイロ、5年後の東京を皆様と一緒に盛り上げていくためにも皆様からの活発なご意見をいただきたい」と訴えた。

■アントラージュガイドラインの説明

テーマ1では IOC のアントラージュガイドラインに基づき作成された「JOC アントラージュガイドライン」について、竹内浩 JOC アントラージュ専門部会員から説明を行った。「アントラージュ」を「選手をとりまく関係者」と表現し、その行動と制裁に関するガイドライン内容の説明、



平岡英介 JOC 専務理事



フォーラムの趣旨説明を行う
高橋尚子 JOC アントラージュ専門部会長



「JOC アントラージュガイドライン」を説明
する竹内浩 JOC アントラージュ専門部会員

NF 内での啓発と取組みを促した。

■エージェント（代理人）とのかかわり方

テーマ2ではスポーツマネジメント会社と選手の代理人が「アスリートを取り巻くエージェントの課題と役割」について、事例報告を行った。最初に山本雅一株式会社スポーツビズ代表取締役社長が、マネジメント会社が行う役割と現役アスリートとの関係やその業務説明を行ない、JOCやNFとも連携を取りながらアスリートの価値とその継続を目標に活動している、と報告した。次に深山計株式会社 RIGHTS. エグゼクティブマネージャーが、アスリートのセカンドキャリアに関わる業務説明がされ、引退後の選手のサポートのみならず、現役中からセカンドキャリアを考えた選手サポートの重要性について報告した。最後に水戸重之弁護士（TMI 総合法律事務所）が、選手の代理人の立場から、エージェント業務やマネジメントとエージェントの違いが説明され、フェアで透明性があり説明責任を果たす関係を選手と構築していくことが重要であることを示した。3名から「スポーツとアスリートの価値を高めるために、アスリートとチーム・NF、代理人が誠実に向き合い連携をすることが重要」という報告をうけ、参加者から代理人と競技団体との連携の仕方、2020年に向けてアスリートが様々な場所で活動する際の課題について、質問があがった。代理人との関わり方に対する関心の高さが伺えた。

■「アンチ・ドーピング」とのかかわり方

テーマ3は「アンチ・ドーピング」とのかかわり方をテーマに公益財団法人日本アンチ・ドーピング機構（JADA）が報告を行ったのち、「アンチ・ドーピング活動を行う上での課題と JADA と NF



マネジメント会社の役割について報告する山本雅一代表取締役社長(株式会社スポーツビズ)



セカンドキャリアの重要性についてを報告する深山 計エグゼクティブマネージャー(株式会社RIGHTS.)



選手代理人の役割について報告する水戸重之弁護士(TMI総合法律事務所)



アンチ・ドーピング活動推進を訴える浅川伸(公財)日本アンチ・ドーピング機構専務理事

との連携」をテーマに、グループディスカッションを行った。最初に浅川伸公益財団法人日本アンチ・ドーピング機構専務理事がアンチ・ドーピングをとりまく世界での取り組みとして、バンクーバー及びロンドンオリンピック・パラリンピックでの取組事例や過去のドーピング事件の影響について報告した。続けて JADA でのアンチ・ドーピングの教育や啓発活動に関する報告を行い、NF と連携したアンチ・ドーピング活動の推進を訴えた。

JADA からの事例報告を受けてのグループディスカッションでは 5 つのグループに分かれて、「アンチ・ドーピング活動を行う上での課題」及び「JADA と NF の連携」をテーマに事例共有と意見交換を行った。「JADA との情報交換ができる場」の要望や「若年層やトップレベル以外の選手に対する啓発の必要性和その課題」や「うっかりドーピングを防ぐため、選手やコーチへの教育」といった意見が複数上がったほか、「選手への期待の高まりがドーピングにつながりやすくなる」と今後を見据えた注意喚起が提示された。

最後に齋藤 JOC アントラージュ専門部会副部会長があいさつに立ち、選手を守るという観点からも、アントラージュとしてのエージェントやアンチ・ドーピングの理念を捉え、「アントラージュは選手を第一に考え、クリーンな選手を育成していくためには周りの人々にどういったことを求めていくか、ということだと理解いただきたい。」と述べ、フォーラムを締めくくった。



グループディスカッションでは
活発な意見交換が行われた



齋藤泰雄 JOC アントラージュ
専門部会副部会長

平成27年度「総務委員会フォーラム」

公益財団法人日本オリンピック委員会総務委員会が設置する3専門部会合同のフォーラムが開催され、アントラージュ専門部会のフォーラムは以下のとおり実施した。

【テーマ】 テーマ1：本年度事業実施報告

テーマ2：あらゆるリスクに関する情報提供

警視庁・警察庁との連携について

テーマ3：アントラージュ向け教育プログラム（教材）について

【日時】 平成28年2月22日(月) 15:10～17:00

【場所】 味の素ナショナルトレーニングセンター 大研修室

【参加者数】 国内競技団体(NF)に担当者を中心に56団体125名

本フォーラムは3つのテーマ構成で行われた。テーマ1は本年度委託事業実施報告、テーマ2はあらゆるリスクに関する情報提供 警視庁・警察庁との連携について、テーマ3はアントラージュ向け教育プログラム(教材)について、のプログラムを実施した。

はじめに高橋尚子 JOC アントラージュ専門部会長があいさつにたち、「アントラージュはフランス語で「取り巻き、環境」という意味をもち、ここでは「アスリートを取り巻く人たち」である監督、コーチ、学校の先生、トレーナー、家族、代理人、いろいろな方々がアントラージュに含まれる」とアントラージュの認識を促した。続いて本フォーラムのでは、本年度の活動報告を行ったのち、選手をとりまくあらゆるリスクに関しての情報提供、アントラージュ向け教育プログラムの紹介をテーマとしている旨を説明。「活発な意見を交わしていただき、有意義な時間としていただきたい」と述べた。



あいさつと趣旨説明を行う
高橋尚子 JOC アントラージュ専門部会長

■本年度事業実施報告

最初に「JOC アントラージュガイドライン」をアントラージュ専門部会にて策定した旨を報告。次にスポーツ庁委託事業「アスリート・アントラージュの連携協力推進」事業とアントラージュ専門部会が合同実施した「アスリートの育成環境の改善に向けたフォーラム」に関する報告を行った。

続いてアスリート・アントラージュワーキンググループにて実施した「アントラー

ジュ向け教育プログラムの開発」と「障害者スポーツにおけるアスリート・アントラージュに関わる課題調査」の報告を行ない、「アントラージュ向け教育プログラムの開発」に関してはのちほどコーチ向け教材を具体的に紹介する旨の説明を行った。

■あらゆるリスクに関する情報提供 警視庁・警察庁との連携について

テーマ2では「あらゆるリスクに関する情報提供 警視庁との連携について」をテーマに、警視庁組織犯罪対策第三課の担当者がスポーツに関する事件の報告を行った。

実際に発生したスポーツに関わる事件を事例にあげ、どのような手口で巻き込まれ、暴力団がどのように関わっていたのか、などを時系列で具体的に説明し、その被害の実態や影響の広さを報告した。また、恐喝をうけた段階で警察に相談したことで早期解決となった事例も報告し、絶対に賭博などには手を出さないこと、また万が一巻き込まれてしまった場合はすみやかに警察や弁護士へ相談するよう訴えた。スポーツ選手は有名人として暴力団に狙われやすいことから、選手には安易な対応をさせないこと、一人で悩ませずコーチや関係者が相談に乗れる環境を作ることが重要であると述べ、「夢と希望ある選手たちに皆さんで指導をしていただきたい」と締めくくった。

■アントラージュ向け教育プログラムについて

テーマ3は「アントラージュ向け教育プログラム（教材）」の紹介を行った。

最初に相馬浩隆アスリート・アントラージュワーキンググループ員が本教材作成の目的やその構成・対象者について説明し、コーチ向けプログラムの一部を体験していただきたいと述べ、内容の説明を行った。

参加者は自分がコーチである、と仮定して、ワークシートを使ってプログラムを実施。また、「指導者の哲学」をテーマにトップアスリート育成に関わるコーチたちへ行ったインタビューのビデオが上映された。その後、プログラムに設定されている「これからの指導者に求められる資質や能力」をテーマに8つのグループに分かれてディスカッションを実施。各NFの指導者やその方針に関する意見交換や情報共有が行われた。「哲学を持つこと」「アスリート・ファーストの視点」の重要性や「コミュニケーション力」「人間力」「マネジメント力」「アスリートからの信頼」「社会的知識」など様々なことが求められていること、という意



教材説明を行う相馬浩隆アスリート・アントラージュワーキンググループ員



「これからの指導者に求められる資質や能力」をテーマにグループディスカッションが行われた

見が複数上げられた。競技によっては指導者の技術力をみせる必要があり、両方の能力を高めていくことも重要である、という意見も上げられた。

最後に齋藤 JOC アントラージュ専門部会副部長があいさつに立ち、「選手を中心として、選手を取り囲むようにアントラージュがいる。悪から選手を守る人もアントラージュであり、選手を育てる人もアントラージュである」と述べ、アントラージュ同士の連携が重要であることを訴え、フォーラムを締めくくった。



齋藤泰雄 JOC アントラージュ
専門部会副部長

平成27年度JOCアントラージュフォーラム実施アンケート結果

第1回「アスリートの育成環境の改善に向けたフォーラム」

平成27年10月27日実施 / 回収数 62(50団体)

質問1 競技団体名をお書きください。

質問2 JOCのアントラージュに対する取り組みについてどう思われますか？

非常に評価する	評価する	あまり評価しない	評価しない
30	30	2	0

質問3 JOCアントラージュフォーラムに参加してよかったと思われますか？

そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
49	10	3	0

質問4 参考になった点や今後に生かしたいことを具体的にご記入ください。

【アスリート委員会に関すること】

(ア) アスリート委員会設置済団体

- ・他競技団体の状況を知ることができた。情報交換することで個々の競技団体の問題解決にとどまらず、日本スポーツ界の発展につながると思う。(同様4件)
- ・アスリート委員会の設置意義が理解できた。(同様3件)
- ・アスリート委員会の役割等、事例報告が今後の展開に役立つ内容が多かった。(同様5件)

(イ) アスリート委員会設置予定団体

- ・アスリート委員会設立の事例報告が聞いたことが大変参考になった。(同様10件)
- ・アスリート委員会が設置されることで、選手が運営であったり競技を知ることによって変わっていくのではないかと思った。(同様1件)
- ・アスリート委員会は選手が不満を言う場ではなく、NFと共同して普及に努める点。(同様1件)
- ・競技団体によってそれぞれの課題があることがわかった。(同様1件)
- ・アスリート委員会がうまく機能するにはどうしたらよいか、考える良い機会となった。
- ・個人スポーツとプロ化方向への対応を含め、アスリートが社会人として成長できる様な委員会を検討したい。

- ・アスリート委員会のある連盟のアスリートの話を聞いてみたい。

(ウ) アスリート委員会設置予定無し団体

- ・他の競技団体の事例や課題がわかり勉強になった。(同様3件)
- ・アスリート委員会の設立ポイント。

【選手選考に関すること】

- ・選手選考について透明化に向けた取組は参考になった。(同様4件)
- ・選手選考の透明化がこれから大変重要であり取り組んでいくべきことと感じた。(同様1件)
- ・選考が明確になれば選手の意識、目標設定が決めやすいし、チームの監督が選手の強化に早く指導方針が組み立てられる。
- ・アスリートファーストを前面に出して推進する。
- ・選考の方法とフォローについて参考になった。特にクオリティを評価(内容)することも大切と思う。選手にしっかり落選の理由を述べることも大事。(同様1件)
- ・選考委員に外部識者の導入。(同様1件)
- ・選手選考などの課題について透明性のある組織を確立していくために選手からのインプットも取り入れるべき。

【その他】

- ・アントラージュ委員会設立を考えて実行したい。
- ・各団体とディスカッションできてよかった。

質問5 今回のフォーラムの進行はスムーズだったと思われますか？

そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	無回答
38	20	1	0	3

質問6 アントラージュに関して JOC に対する要望等がありましたらご記入ください。

【アントラージュに関する要望】

- ・セカンドキャリアとどう連携していくかも重ねて検討を。
- ・チーム競技に向けた啓蒙を考えていただきたい。アスリートが意見をあげるにはアントラージュ(所属チーム/指導者など)全体で理解が必要であると考えている。NF としても取り組むが、アスリート界全体のムーブメントを末端にまで知ってもらうためのツールを活用したい。
- ・広く国民にもアントラージュの重要性を PR してほしい。
- ・各競技の特徴もあり、各 NF でも考えてほしい。
- ・現在、ジュニアの育成に力をいれてる。10年後を視野に選手育成の後押しを

お願いしたい。

【フォーラムに関する要望】

- 継続してフォーラムを開催してほしい。(同様3件)
- ディスカッション形式はよいと思う。(同様1件)
- 選手環境を整えることをテーマとして、各競技団体とディスカッションしてはどうか。
- ディスカッション時にグループ間が近く、聞き取りにくい部分があった。
- すべてNFにまかせるものではなく、方針を常に示してもらうことの大切さを知った。(フォーラムの大切さ)
- 他の競技の状況報告を定期的に行ってほしい。
- 選手を取り巻く環境は各NF様々だと思う。今後も参加して、情報共有していきたい。
- スムーズすぎて大変テンポが速くて詰め込み感がある。
- 選手を呼んで事例や課題などを話してもらう。
- 他のNFの意見が数多く聞けて本当によいフォーラムであった。今後もこのような機会があると良いと思う。
- 団体競技、個人競技の特性があり、それによって問題等の発生の仕方も異なることから、団体・個人に分けたフォーラムを実施しても良いのではないか。
- ディスカッション時間配分をしっかりとってほしい。
- NFから担当者が出てこられる様、夜間もしくは土日の開催が良いのではないか。
- 他団体の動向等、情報発信を続けていただきたい。

【アスリート委員会・選手選考について】

- すでに設置済のNFの詳細情報を知りたい。メンバー数(男女)、選出方法、任期、会議回数/年、経費負担 etc.
- アスリート委員会の会議を平日以外で開催してほしい。
- NFの歴史やシステム、競技特性によって必ずしもアスリート委員会がフィットしない事もあると思う。若いアスリート側の意見がもう少しほしかった。
- アスリート委員会設立の推進についてはJOCからの働きかけが重要になってくと思う。
- 選手選考に関するトラブルはスポーツ界全体の価値・評価を下げることになるので整備することはよいと思う。

第2回「アスリートの育成環境の改善に向けたフォーラム」

平成27年12月24日実施 / 回収数 46(41団体)

質問1 競技団体名をお書きください。

質問2 JOCのアントラージュに対する取り組みについてどう思われますか？

非常に評価する	やや評価する	あまり評価しない	評価しない
18	28	0	0

質問3 JOC アントラージュフォーラムに参加してよかったと思われますか？

そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
27	18	1	0

質問4 参考になった点や今後に生かしたいことを具体的にご記入ください。

【アントラージュに関するガイドライン】

- ・アントラージュという言葉がまだ浸透していないのが事実である。しかし、選手の環境を整える上では非常に重要な人材であり、教育することは不可欠である。IOCの承認事項である以上、義務であるため、今後広めていく対応を検討しなければならないと感じた。
- ・選手及びアントラージュメンバーへの制裁についてはIFからも話がきていたので参考になった。(同様1件)
- ・アントラージュの定義は理解できた。(同様1件)
- ・アントラージュメンバーへ制裁を課すためのガイドラインについては、内部の倫理規定と合わせて検討する必要があると感じた。
- ・アントラージュの定義がNFから実効的な力が及ばない範囲まで含まれている中で、制裁対象行為が選手活動に関わる範囲に限定する表現が見当たらず、ガイドラインの効力に疑問がある。
- ・ガイドラインをじっくり見れたので、当協会でもアントラージュの行動について勉強させたい。
- ・ガイドラインについての説明と質疑応答により、NFとしてやるべきこと。

【エージェント(代理人)とのかかわり方】

- ・マネージメント会社とNFと連携するにあたり、マネージメント会社の意識するポイント等十分理解し、互いにアントラージュとして選手の価値を高めていきたい。
- ・エージェントとマネージメントの関係を理解することができた。

- チームゲームには昔は関係なかったが、最近は個人としての活動も活発になり、また個人を売り出すことでのマーケティング誘導も出てきており、団体及び個人にとって代理人の存在の必要性を感じた。
- エージェントとのかかわりについて、いろいろな事例をあげてもらいたい。参考になった。
- エージェントに対する理解が深まった。(同様 1 件)
- スポーツマネジメントについて、普及振興を図りたい NF、スポーツビジネスを高めたいエージェント、自分自身の価値を高めたいアスリート、その支援をする所属企業や家族、学校等の連携が重要だと感じた。
- プロスポーツ団体ではありませんが、メディアへの露出等を考えると代理人の話は参考になった。
- エージェントとの関わりはもう少し聞きたかった。
- 今後、NF と代理人のかかわりが問題となるなと思った。
- 「エージェントとの関わり方」は現時点で団体に関連しているアントラージュの概念とは違って興味深く参考になった。
- 選手に対するマネジメントの分野で、エージェント・選手・NF の契約含めた役割分担について。

【「アンチ・ドーピング」とのかかわり方】

- JADA の取り組みについて、今一度認識することができた。
- ドーピングの子供世代への教育の大切さ。(同様 1 件)
- ドーピング問題がスポーツ環境を整えるカギ。
- NF 及び選手ともに最低限のルールを把握しておくことだけでは足りない。特に若年層及びナショナルチームへ新規加入した者への個別指導を実施しなければならない。講習会及び協会 HP に詳細の情報発信を心がけていきたい。
- ファーマシストの活用。(アンチドーピング)
- アンチ・ドーピング活動について重要性や理解を深めることができた。(同様 2 件)
- 他団体の取り組み、抱える課題が参考になった。(同様 2 件)
- ドーピングに関する説明、ディスカッションは有意義だった。今後の活動に役立つと思う。
- アンチ・ドーピング教育、普及、体制について。
- 日本で開催する世界選手権大会に向けて、早急にアンチ・ドーピングに対する活動を推進していく必要性を感じた。
- 選手へのドーピング知識への普及活動に力を入れたい。(全国的に講習、研修に取り込み活動したい)

- アンチ・ドーピングの目的の再確認と具体的進行方法のアイデア考案。ドーピング違反がなぜ起きたのかの原因究明と再発防止の提示をしていただくことが必要かと思う。

【その他】

- 協会としてさらに理解を深めたいので、このような機会を又、作っていただきたい。
- スポーツの価値が高くなるにつれて、アントラージュ（選手に関わる人々）のあり方に対する高潔さが求められているのだ、と理解した。2020年東京オリンピックの成功には選手・コーチだけでなく多くの日本の人々の協力が必要だ。
- アスリートファーストの考え方を多角的にみることができた。NFとして、各場面でどのようにアスリートファーストを実践していくべきかを考えていきたい。
- （冬季競技団体のため）この時期はやめていただきたい。
- Playerの環境を考えると、単独ではなく連携して考え取り組む必要について考えることができた。
- ディスカッションの時間が少なかった。

質問5 今回のフォーラムの進行はスムーズだったと思われますか？

そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	無回答
24	20	0	0	2

質問6 アントラージュに関して JOC に対する要望等がありましたらご記入ください。

【アントラージュに関する要望】

- 各 NF 一任ではなく、NOC としてのガイドラインや定型文などがあると進めやすいと思う。法的な対応も含むため、NF の規定等との整合性も確認が必要となる。窓口があると良いかもしれない。（同様1件）
- アントラージュの範囲が広く、NF として具体的に彼らにどう展開していくのか、そのあたりをアントラージュの対象別に対応していくノウハウがほしい。
- NF として定型契約書を用意する点について、JOC 様式契約書を提示いただければありがたい。
- NF でも活用できる一般向けの啓蒙活動ツールがあるとよいと思う。（同様1件）
- 選手に対してアントラージュを PR する際「アントラージュ」という言葉が非常にわかりづらい。「選手を取り巻く関係者」よりよい和訳があるとよい。
- 選手のアントラージュに関するガイドライン等のデータの提示をお願いしたい。関係者にしっかり伝えていきたい。

【フォーラムに関する要望】

- 事務局を対象にも行ってほしい。
- 時期が悪く、もう少し余裕のある時期に。選手が参加しやすいようにしたい。
- 冬季競技団体としては、本日の開催は非常に厳しい。開催期日を良く検討していただきたい。
- エージェントまたはマネジメントスタッフがNFあるいはアスリートの〇〇の問題を××して解決した、というような具体的な話が聞きたかった。（とこころでばかした説明で印象に残らない）
- 次回もテーマを変更し、実施を希望する。
- 次回はNFの取り組み事例聞きたい。
- ディスカッションの時間は最低30分は必要だと思う。また、ディスカッションテーマは事前に意見を提出してもらい、事前に議長が読んで議論を進めると無駄がなくなると思う。
- NF間での情報の共有は非常に参考になると思う。意見交換ができる機会がもっと増えればありがたい。

【その他】

- 本日のテーマについては、選手に対する周知も考えていくべきだと思う。特にセカンドキャリアについては選手にとって重要なテーマであるのでNFとマネジメント会社が共に考えていくべきであろう。
- 指導者、選手の教育プログラムに入りたい。
- ドーピングについて、うっかりした処置でおきた、又、色々なケースについて、事例を開示していただくと身近な問題として講習会などに取り込み易い。

平成27年度「総務委員会フォーラム」（3 専門部会合同のフォーラム）

平成28年2月22日実施 / 回収数 46(40団体)

* 以下、アントラージュに関する質問、回答を抜粋

質問 1 JOC のアントラージュに対する取組みについてどう思われますか。

非常に評価する	評価する	あまり評価しない	評価しない	無回答
26	17	1	0	2

質問 2 今回のアントラージュ専門部会のプログラムのうち、最も良かったものはどれですか。

A. あらゆるリスクに関する情報提供／警視庁との連携について	19
B. スポーツ庁委託事業実施報告	22
無回答	5

質問 3 作成されたコーチ向け教材は、今後求められるコーチ育成のための教材として有効だと思いますか。

非常に有効である	有効である	あまり有効でない	有効でない	無回答
19	22	2	0	3

以下、フォーラム全体へに関する設問より抜粋

質問 4 参考になった点や今後に生かしたいことを具体的にご記入ください。

【あらゆるリスクに関する情報提供 警視庁・警察庁との連携について】

- ・対暴力団対策は目からうろこだった。
- ・反社会的勢力への対応について、が良かった。

【アントラージュ向け教育プログラム(教材)について】

- ・教育教材は、指導者養成事業においても有効だと思った。(同様 1 件)
- ・教育プログラムの体験は良かった。研修会で利用したい。(同様 1 件)
- ・指導者哲学の確立や、今後のコーチ学に反省させられた。
- ・コーチ向け教材について、ディスカッションをしたことで、自分の未熟さを知ることが出来た。
- ・様々なコーチングはあるが、日々の振り返りの重要性を感じた。
- ・教育教材の NF 内での紹介。
- ・教育教材の映像教材に関心を持った。

【アスリート・アントラージュについて】

- 競技者以外にも、周りを取り巻く全ての環境について考え対応していくことが重要であると感じた。

質問 5 今後のフォーラムで取り上げてほしいテーマをご記入下さい。

- 暴力団排除の具体的行動
- リスク管理
- マスコミ対応
- ドーピング関連（同様 1 件）
- 法令遵守（ガバナンス系のもの）
- 学業との両立
- 選手の移籍

質問 6 フォーラムに関して JOC に対する要望等ありましたらご記入下さい。

- アントラージュ教材は素晴らしいと感じたが、各 NF が共通して利用する冊子等への掲載がなければ、利用されないのではないかな。
- 事務局の立場で、コーチの指導について述べにくい。
- 事前連絡等で、現物や映像を見せて欲しい。
- グループディスカッションが多いが、多様な意見が聞けるので良い。
- ディスカッション内容の発表時間が短い。
- フォーラムの報告書をデータで欲しい。

② 教育プログラムの調査

諸外国のアントラージュに向けた教育プログラムに関し、先進事例調査の実施および、IOC アントラージュ委員会と情報交換を重ねた結果を以下に報告する。

1. アントラージュに向けた教育プログラムは、諸外国にほぼ存在しない

諸外国でのアントラージュ教育プログラムの調査を行った結果、選手へのライフスキル教育やキャリアサポートのプログラムは確認できたが、アントラージュの連携協力推進のための教育プログラムは、ほぼ存在しないことが確認された。

2. アスリートの保護者向けプログラムは存在する

そのような中で、アスリートの保護者向けプログラム（sport parenting）は多数存在することが確認できた。それらの多くは、以下の内容で構成されている。

- ・保護者は、選手である子供とコーチがスポーツに取り組みやすい環境を支援する
- ・保護者は子供のスポーツ参加に、ポジティブな動機付けをする
- ・保護者とコーチはコミュニケーションを持ち、関係性を保つ
- ・保護者はコーチが掲げる目標を理解し支援する。子供の前でコーチを批判しない

特徴的な例として、保護者が子供に、スポーツする目的を確認させるワークシートが確認された。(Jim Thompson, The High School Sports Parent: Developing Triple-Impact Competitors, 2009)

3. アントラージュ向け教育プログラムの提供／IOC ホームページ

そのような状況の中、IOC はアントラージュ向けのプログラム提供を行っていることが確認された。以下にその内容を報告する。

■ IOC ホームページ記事 アントラージュ

Home>Athletes>Athletes' Space>Entourage

(<http://www.olympic.org/entourage#entourage>)

選手を取り巻くあらゆるアントラージュが図示され、そのなかでも Families / Friends, Coaches, Agents / Agencies, School / Universities に対しては具体的な情報提供がある。Families / Friends に提供される情報は、保護者向け情報であった。



■オリンピック競技会会場での教育プログラム

ソチ冬季オリンピック（2014）、ロンドンオリンピック（2012）、ユースオリンピックゲーム（2012）の各競技会会場では、アントラージュ教育プログラム「Coaches and Entourage Night」が提供された。

③ プログラム開発（2）

上記のようなアントラージュに向けた情報提供の傾向を鑑み、アントラージュの概念を伝えるべき対象の優先順を検討した結果、本年度は保護者向け、コーチ向け教材を開発することとした。アントラージュの中でも、特に重要度の高い属性（コーチ、競技団体、保護者）に向けた教育プログラムを開発し、試行することを目的として、以下の要件を設定した。

■アスリート・アントラージュの概念を周知するためのプログラム開発定義

【要求】

教育プログラムを受講した保護者／コーチが以下に関する必要性に気付き、対処法を学ぶことができる。

- ・アントラージュはアスリートの身体的、社会的成長を守る。
- ・アントラージュはアスリートを倫理的問題（八百長、賭博、ドーピング）から守る。

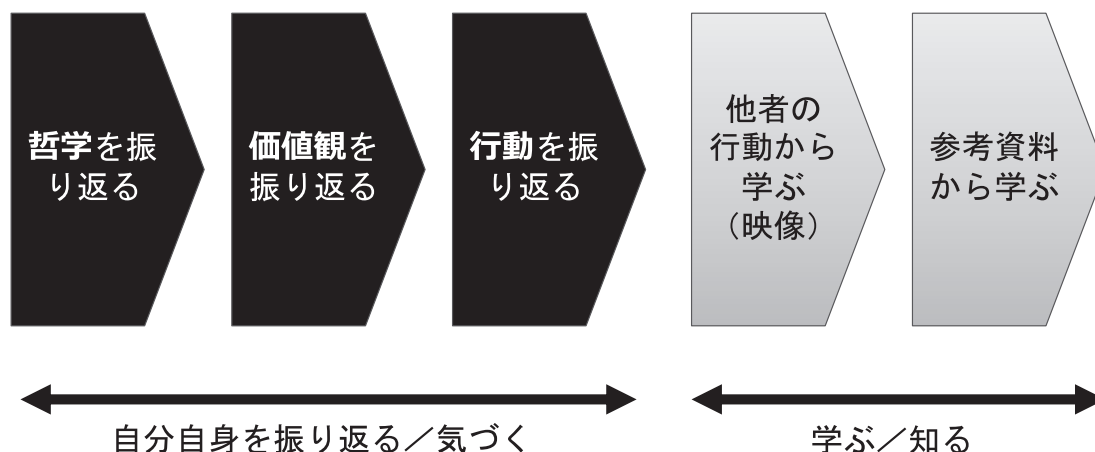
【要件】

- ・IOC が示す方針に沿った内容である。
- ・知識を得るだけでなく、体験やディスカッションを通じて理解を深める「アクティブラーニング」に対応する。
- ・受講の負担を減らすため、短時間（最大で3時間程度）で学べる。
- ・受講者が興味を持てるよう、インタビューなど映像教材を使用する。
- ・広くデリバリーできるよう、ホームページにて公開・配布できる。

④ 教材の概要

1. 教材の構造

コーチ、保護者としてどのように選手を支援していくか、その理念や哲学を自分ごととして考えられる「参加型」で学ぶ教材とするため、以上の構造に基づき作成した。



- ・コーチ向け、保護者向けともに、映像教材、ワークシート、参照資料のセットで提供する。
- ・ケース分析やワークシートによる自己分析を元に、グループワークに発展できるものとする。
- ・これらの教材を使用したワークショップを開催する場合、コーチ向けは90分×

2 時限、保護者向けは 60 分×2 時限を基準とする。

- ・参照資料の多くは、国際オリンピック委員会が提供するアントラージュ向け資料を翻訳しているが、国内事情にあわせて一部改定する。

2. コーチ向け教材概要

コーチ向け教育プログラムは以下で構成される。

■ワークショップ1：指導理念、指導哲学

- ・イントロダクション
これから求められる指導者像「グッドコーチに向けた7つの提言」
- ・ワークシートによる自己分析
指導哲学の確認、指導の目的、3つのコーチングスタイル
- ・指導者の哲学（映像教材）
- ・参加者によるディスカッション
- ・参照資料 「優秀なスポーツコーチの資質」

＜映像教材：取材対象者＞

No.	コーチ／選手	競 技	取材日	備 考
1	飯島健二郎 足立真梨子	トライアスロン	2015 12/13	飯島：ロンドン五輪・トライアスロン代表監督 足立：ロンドン五輪 14 位、アジア選手権金メダリスト
2	上野山信行 —	サッカー	2016 1/7	ガンバ大阪：アカデミー本部・強化本部担当顧問
3	竹村 吉昭 —	競 泳	2016 1/8	(株)ジェイエスエス コーチ シドニー五輪女子 100m 背泳ぎ銀メダリスト中村真衣、リオ五輪女子 200m 平泳ぎ代表渡部香生子のコーチ
4	中竹 竜二 —	ラグビー	2015 12/8	20 歳以下 (U20) 日本代表監督
5	山下佐知子 尾崎 好美	マラソン	2015 12/15	山下：第一生命女子陸上部監督 尾崎好美を育成 尾崎：世界陸上選手権銀メダリスト、ロンドン五輪 19 位





映像作成：渡辺 護、山本 英

■ワークショップ2：反人道的行為、反社会的行為

・イントロダクション

反人道的行為、反社会的行為とは？

・ケース分析による課題の理解

精神的暴力および言葉の暴力、セクシャルハラスメント、八百長、アンチドーピング

・参加者によるディスカッション

・参考資料 「ハラスメントについて知る、反社会行為・半人道的行為について知る」

3. 保護者向け教材概要

保護者向け教育プログラムは以下で構成される。

・イントロダクション

これから求められる保護者像ケース分析による課題の理解

・ワークシートによる自己分析

子育て哲学、スポーツ子育ての目的

・保護者の子育て哲学（映像教材）

4人の保護者が持つ「スポーツ子育て哲学」について

- ・参加者によるディスカッション
- ・参照資料 「スポーツ子育ての Tips（秘訣）」

<映像教材：取材対象者>

No.	親／選手	競 技	取材日	備 考
1	遠藤 武義 —	サッカー	2015 12/22	ドイツ、南アフリカ、ブラジル W 杯男子サッカー日本代表 遠藤保仁の父
2	太田義昭・妙美 —	フェンシング	2016 1/23	北京、ロンドン五輪銀メダリスト 太田雄貴の両親
3	高木 愛徳 —	スピード スケート	2015 12/23	2015 世界距離別選手権団体パシュート金メダル 高木美帆の父



映像作成：渡辺 護、山本 英

4. プログラム利用マニュアルの作成

コーチ向け、保護者向け教材は JOC ホームページを通じて誰でも入手できるようにすることを計画しているが、入手した教材を活用したセミナーを主催する方のために、その活用方法を示したファシリテーションガイドを作成した。

これらの教材は、JOC ホームページ内「アントラージュ」にて平成 28 年 5 月以降に公開を予定している。

⑤ 検証

本教材のトライアルを以下の要領にて実施した。その結果は以下のとおりである。

コーチ向け教材の検証

【日 時】平成 28 年 2 月 22 日(月) 15:50～16:40

【場 所】味の素ナショナルトレーニングセンター 大研修室

【参加者数】アントラージュ専門部会フォーラム参加者 46 名

アントラージュ専門部会のフォーラム参加者に対し、コーチ向け教材のテスト実施を行った。時間の制約上プログラムの一部を用いており、中にはコーチではない出席者は自身をコーチだと仮定して参加した。結果は以下のとおりであった。



コーチ哲学について
ディスカッションを行う参加者

質 問：作成されたコーチ向け教材は、今後求められるコーチ育成のための教材として有効だと思いますか。

非常に有効である	有効である	あまり有効でない	有効でない	無回答
19	22	2	0	3

「非常に有効である」19 回答（41%）「有効である」22 回答（48%）であり、有効であるという評価を得ることができた。

保護者向け教材の検証①

【日 時】平成 28 年 3 月 6 日(日) 13:30～15:30

【場 所】和歌山県勤労福祉会館プラザホープ研修室

【参加者数】和歌山県ゴールデンキッズ発掘プロジェクト対象者の保護者 10 名

和歌山県ゴールデンキッズ発掘プロジェクトに参加する子供の保護者 10 名に対し、保護者向けプログラムのテストを実施した。参加者は小学校 6 年生から中学生まででゴールデンキッズ発掘プロジェクト対象の子供を持つ保護者であった。結



ワークシートに沿って
ディスカッションを行う参加者

果は以下のとおりであった。

質問1 本セミナーの内容について、どう思われますか？

非常にわかりやすい	わかりやすい	ややわかりにくい	わかりにくい
5	5	0	0

質問2 以下の教材について、どう思われましたか？

1) ワークシート

非常に参考になった	やや参考になった	あまり参考にならない	参考にならない
6	4	0	0

2) ビデオ

非常に参考になった	やや参考になった	あまり参考にならない	参考にならない
6	4	0	0

3) 現役アスリート保護者の話

非常に参考になった	やや参考になった	あまり参考にならない	参考にならない
6	2	0	0

質問3 参考になった点や今後に活かしたいことを具体的にご記入ください。

- ・子供とのコミュニケーションやビジョン（目標設定）について、現役アスリートの保護者の話を参考にしながら、我が家の子供たちのサポートにつなげていきたい。
- ・アスリートをもつ保護者の方々のいろいろな意見（同じ意見やちがう意見）が聞けてよかった。（同様3件）
- ・親としてぶれない姿勢であることの大切さ、子供たちが迷った時に冷静に導いていただけるよう心がけたい。
- ・種目別でこういう機会があればいいとおもう。
- ・自分が親として子供に接してきた態度がこれでよかったのか、これでいいのか、軸の部分で悩んでいたのでいろいろな考えや違いを知る機会になってよかった。
- ・今後も何をすべきか、どうありたいか、子供と話をしながら家族として一緒に歩んでいきたい。
- ・現役アスリートの保護者の方たちの話が非常に参考になった。ぶれない意見、考えを持っていることが印象に残った。
- ・どう協力してやればいいのか、私たち親の役割について迷うときがあったが、非常にわかりやすく、今日学んだことを実行させてもらおうと思った。

- 声のかけ方、親の位置、目的、コーチや監督とのかかわり方、子供の気持ち、喜び。
- 今ではなく、中学進学時より前にこういう話を聞きたかった。今後、高校進学時に参考にさせてもらいたい、という意見もあった。勉強もしっかりさせなくてはいけないな、と改めて思った。
- いろいろ考えることができた。
- 子供の意見の尊重とは何か？ むずかしい。

質問 4 本セミナーの内容は今後役に立つと思われますか？

そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
8	2	0	0

質問 5 教材に関するご要望等がありましたらご記入ください。

- 実際の映像でアスリートの保護者さんの話、ゲストの話がありとても身近に感じられて良かった。
- 成功の例ではなく、アスリートの方々の悩み、ぶつかった時の導き方について。
- スポーツによって違う指導もあると思うので、色々な経験談を聞きたい。
- 種目変更に関して考えることがある。競技の多様化。

保護者向けプログラムは「非常にわかりやすい」「わかりやすい」と感じ、「今後役に立つと考える」という評価となった。

ツールに対しては「非常に参考になった」「参考になった」という評価をうけた。保護者としての軸の重要性や子供への態度、接し方に関する気づきを得ることができた、というコメントがあり、保護者への教育教材として一定の効果があるものと考えられる。

また「他の親の意見が聞けたことが参考になった」というコメントも多く、本教材を通して保護者間の意見交換の場が提供できることも示唆された。

保護者向け教材の検証②

【日 時】

平成 28 年 3 月 13 日(日) 10:30 ~ 12:00

【場 所】

味の素ナショナルトレーニングセンター研修室

【参加者数】

卓球小学校女子選手の保護者とコーチ 35 名



積極的に参加する受講者

卓球小学生女子合宿に参加した女子選手の保護者およびコーチ 35 名に対し、保護者向けプログラムのテストを実施した。参加者の中にはコーチでもある保護者、コーチが参加していたため、自身が保護者であると仮定して参加した。結果は以下のとおりであった。

質問 1 本セミナーの内容について、どう思われますか？

非常にわかりやすい	わかりやすい	ややわかりにくい	わかりにくい
25	9	1	0

質問 2 以下の教材について、どう思われましたか？

1) ワークシート

非常に参考になった	やや参考になった	あまり参考にならない	参考にならない
29	6	0	0

2) ビデオ

非常に参考になった	やや参考になった	あまり参考にならない	参考にならない
20	15	0	0

質問 3 参考になった点や今後に活かしたいことを具体的にご記入ください。

- ・グループディスカッションにより他者の考えから新たなことに気づけた。(同様 1 件)
- ・保護者は保護者としての役割や、サポートの仕方などを選手と同じくらい勉強しないといけないなと感じた。(同様 1 件)
- ・競技者に限らず指導者や保護者もしっかり目標を決めてサポートしていけたらと思った。(同様 1 件)
- ・トップアスリートの親の考え方、育て方、子供の接し方がわかり今後活かしたい。
- ・あらたなひらめきがあった。(後から見守るのでは子供で先が見えないから横に寄り添って会話しながら見守るなど)
- ・難しい質問が多かったので、もう少し語学を学ぼうと思った。
- ・大変有意義な時間だった。
- ・他の方と話し合うなかで、同じことで悩んだりしていることもわかり、共感することも出来た。
- ・保護者と選手の関係性はなかなか答えが出ないので、考えすぎは良くないと思った。
- ・普段なんとなく思っている事もいざ項目ごとに明確にすると、ぼんやりしていた事に気づき、保護者としてどうあるべきかを改めて考えることができた。(同様 1 件)
- ・子供との接し方をもう一度考えたいと思った。

- 人それぞれ、色々な意見や考えがあり当然だと思ったが、何が正しいという答えはないと思った。
- 子供がのびのびとスポーツできるように、裏でしっかりサポートしていきたい。
- 目標を設定して、そこに向かうまでにどうしたらいいのかという考えが出来、これから子供にどうしたいかがしっかり目を向けられると思った。
- 子供の理解者になれるよう、サポート、マネジメントが出来たらと思う。
- 子供たちをもっとほめます。
- 保護者としてのあり方を子供の進路、将来にいかしていきたい。
- アスリートの親の生の声は説得力があった。もっといろいろな声を聞きたい。(同様1件)
- 最後に見たビデオのお母さんの保護者の話。今もそのつもりですが、全力で子供を応援する、支えることが大切だと思う。
- 競技人生だけでなく、競技人生後もどうしていくのかなども考えておくことが必要だと感じた。(同様1件)
- 競技後の人生についてはあまり考えたことがなかった。
- 保護者目線の悩みがより理解できた。
- 多くの保護者の方の意見を聞くことができ、今後の指導の参考になった。(同様1件)
- コーチ、保護者の気持ちが一致してこそ子供がスポーツに取り組めるのだと実感した。
- 子供への接し方、指導者の方が考えていることなど参考になった。
- 保護者の方と接してくわしい話を聞かせていただいたので、厳しくするのも大切だけどほめたりすることも大切なのでそこを中心にやっていきたい。
- 上から目線にならないこと。
- 他の保護者の方とディスカッションする時間がもてるきっかけをつくる場として、非常に良い研修だと思う。(同様1件)
- 様々なコーチと話すことによって、自分が思っているものと違った考えを知ることができたので、それぞれの意見を参考にさせていただき今後に活かしたい。
- 選手に対して自主性を促すという点をもっと考えたいと思う。
- いろいろな考え方があるという事も把握して指導していきたい。
- 方針を伝えることが重要だと思った。(同様2件)
- 選手も(選手だけでなく)指導者が明確な目標を持ち、そこへ向けて達成する方法や努力を考えることの重要性を再認識することができた。
- 選手のメンタル面などのサポート。
- 指導者と保護者のかかわり方。
- 現場での悩み解決法。

質問4 本セミナーの内容は今後役に立つと思われますか？

そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
32	3	0	0

質問5 教材に関するご要望等がありましたらご記入ください

- ・簡単に答えられる質問ではなかったので、事前配布などで合宿に参加している間にもう少し考える時間があっても良かった。
- ・失敗からどのように復活したか。
- ・コーチ側の話を含めて聞ければよい感じがした。
- ・資料がほしい。(同様1件)
- ・クラブの保護者にこういう内容を受けてもらいたいと感じた。
- ・できればビデオを何かしらの形で持ち帰りたい。
- ・今のままでいいと思う。
- ・ただ参加する研修、見学する研修でなく、参加者の思いをぶつけあう今回のディスカッションの機会はとても良かった。
- ・ビデオには字幕をつけていただきたい。耳の不自由な方にもわかるように。

受講者に保護者ではないコーチも含まれていたため、「ややわかりにくい」の評価もあったものの、前回同様に保護者向けプログラムは「非常にわかりやすい」「わかりやすい」と感じ、「今後役に立つと考える」という評価となった。ツールに対しては「非常に参考になった」「参考になった」という評価をうけた。「保護者としてどうあるべきか再度考えたい」「アスリートの親の生の声は説得力があった」「競技人生後もどうしていくのか」というコメントがあり、保護者への教育教材として一定の効果があるものとする。前回同様に「他の保護者の意見が参考になった」というコメントがあり保護者間の意見交換の場が提供できることが確認できた。他、今回は保護者だけでなくコーチも受講したことからコーチと保護者との意見交換ができたことへの評価が見受けられ、保護者とコーチの意見交換の場を提供できる教材となる可能性が伺えた。

⑥ 課題

アスリート・アントラージュの概念を周知するためのプログラムを開発と検証を通して、以下の課題があげられた。

1. 利用促進

たとえ十分に効果的な教材であったとしても、その存在が知られなければ広く様々な方に利用されることはない。また、本教育プログラムは受講者同士のディスカッションを通じて学びが深まる構成になっているが、そのディスカッションをリードするファシリテーターが適切に進行しなければ、効果的な学びの場を設けることが難しい。

教材の存在を知らせるために、そしてディスカッションをリードするファシリテーションの進行の見本を示すために、モデルとなる事業を実施することが望まれる。

2. ファシリテータの養成

この教材を進行する進行役、ファシリテーターの養成を事業として実施し、適切な人数が養成されれば、モデル事業を広く展開する可能性がさらに高まる。

3. 継続的な管理、運用

教材は、作成が完了すれば自動的に活用が広がるわけではない。完成された教材が広く活用されるよう周知することや、教材の活用事例など見本を示す、教材の改善をする、不足している部分を追加するなど、管理、運用を継続することが、教材の活用を広げるためには必要であろう。

4 課題への対応

平成 26 年度から 27 年度にかけて本委託事業を通じて示された、アスリート・アントラージュが連携協力し、コーチング環境を改善することに関する課題、そして、それに対して平成 27 年度に作成した教育教材がどのように対応したのかは以下にまとめられる。

【1】選手の主体的な行動を支援する取り組みが十分でないことへの対応

①すべて上から押し付ける指導は誤りであることへの理解が十分でない

今回制作した教材における最も強いメッセージは、指導者（コーチ）向け教材においては「命令スタイルのコーチングのみでは、長期的な視点で選手の成長に寄与できない」、保護者向け教材においては「指示スタイルの子育てのみでは、長期的な視点で子供の成長に寄与できない」ということである。この意味で、課題に対しての対応はできたと考えている。

しかし、では協働スタイルと命令スタイルをうまく使い分けるために、どのようなコミュニケーションをする必要があるか、具体的な方法論までは、この教材は踏み込んでいない。教育プログラムにさらに改善を重ねる場合は、この点は優先的に取り組む必要があるだろう。

②選手の権利と義務を明確にするためにも、選手の意見を聞き入れる仕組みが必要

選手が所属する競技団体にも帰属意識を持ち、互いに敬意を持ちながら、団体の運営にも関わっていくことを具体化するひとつの方法は、アスリート委員会など対話の窓口となる仕組みを作ることであった。

今回、教育教材の一部として位置づけた「アントラージュフォーラム」では、JOC アスリート専門部会と共同で、アスリート委員会設立をテーマとしたディスカッションを開催した。この意味では、課題に対しての対応はできたと考えている。

しかし競技団体関係者によるディスカッションを促しただけで、アスリートや競技団体の具体的な行動に結びつくとはいえない。アントラージュフォーラムを今後も継続していく場合、この点は優先的に取り組む必要があるだろう。

【2】主体的な行動の基となる、選手としての在り方を選手自身が考える機会が十分でないことへの対応

選手としての在り方を、選手自身が考えることの重要性は、2 年間の本委託事業を通じて改めて確認することができた。このことについては、IOC が提供する athletes'

lifetime skills（競技者としてのライフスキル）に示されるように、アスリート向けのキャリア教育分野にすでに蓄積がある。これらを参考にしながら、我が国のスポーツ環境、社会状況に適した教育プログラムが開発されることを期待したい。アスリート・アントラージュに対しては、これらの教育プログラムが提供されたときに、それをアスリートに紹介し、利用を促すことが求められるであろう。

【3】アスリート・アントラージュが連携協力することについての理解が十分でないことへの対応

アスリート・アントラージュにはどのような役割が期待されているか、なぜアスリートを支えるのかについては、フォーラムの開催及び教材の提供を通じて、受講者の方々には一定の理解が進んだと思われる。受講してご理解いただいた方には、具体的な行動に結びつけるための更なる働きかけが、未受講者にはできるだけ多くの方々に受講いただくことが、今後は求められていくであろう。

【4】本年度事業において明らかとなった課題

本年度事業で開発された教育プログラムが伝えてきたことのひとつは、スポーツには青少年を「人としての成長を促す」教育的側面があり、それを守ることが大切だということだった。人としての成長が大切だからこそ、反社会的行為や反人道的行為からアスリートを守る必要があるし、アスリートの競技者としての成長だけでなく、社会的成長を促す必要があるという論理である。

しかし、これらのメッセージは必ずしも、完全な同意をもって受講者に受け取られたわけではない。受講者の中には、アスリートに自立を促すことの必要性を感じない、あるいはスポーツにこのような側面があることに関心を持たない保護者や指導者も、わずかではあるが存在した。そのようなの方々には、開発された教育プログラムは計画した効果をもたらさなかった可能性がある。

このような状況は、これまで我が国のスポーツ界全体が、スポーツが持つ教育的側面を社会に十分に説明してこなかったこと、そして、スポーツを終えた後の人生を見据えたうえでの強化が必要であると、強化の現場に十分に説明してこなかったことも一因だったと考えられる。アントラージュに向けた教育プログラムがより効果を発揮するためには、これらの課題についても同時に取り組んでいく必要があると思われる。

【5】今後の展望

アスリート・アントラージュは我が国にとって新しい概念であり、アントラージュに該当する方々の間にも学ぶ必要性が顕在化されたものではない。また、一部のアントラージュには理解が難しい側面もある。したがって教育プログラムをただ公開する

だけでは普及につながらない懸念がある。

今後、この教育プログラムが活用されていくためには、少なくともプログラムの存在や学ぶことの必要性に一定の理解が広がるまでの間は、しかるべき組織がリーダーシップを発揮して、プログラム提供を続けることが望まれる。

5 | おわりに

平成 27 年度、本委託事業「アスリート・アントラージュの連携協力推進」では、これまで十分に共有されていなかった概念である「アスリート・アントラージュ（コーチ、家族、マネージャー、トレーナー、医師、教員、関係団体など）が連携協力」することの必要性や対応方法を知らせる、教育プログラムを開発することを中心に取り組んだ。

この作業にあたり最初に取り組んだのは、プログラムを通じて受講者に伝えるべきメッセージを絞り込むことであった。つまり、なぜ、何を守るのかということである。この課題に対する私たちの結論は、昨年度から当事業を通じて知見を重ねることによって得た以下のことであった。

アスリート・アントラージュは以下を守る必要がある。

- ・アスリートの身体的成長、社会的成長（アスリートとしてのキャリア、及び人としてのキャリア）を守る
- ・アスリートを倫理的問題（反人道的行為、反社会的行為；ハラスメント、違法な賭博や買収、ドーピングなど）から守る

なぜならば、守らないとアスリートの人生や尊厳が危機にさらされるからであり、引いては、スポーツが持つ教育的側面や高潔さが危機にさらされるからである。

この結論に沿って本年度は指導者向け、保護者向けの教育プログラムを開発し、試行をしてきたが、現在までのところ、受講者の方々にはメッセージを好意的に受け止めていただけていると感じられる。できるだけ多くの方々にこの教育プログラムを届けることができるよう、引き続き取り組んでいきたい。

また、教育プログラムの一環であると位置づけたフォーラムでは、アスリート委員会の設立、選手選考の透明化、エージェントとの付き合い方などアスリートのキャリアを守ること、そしてドーピングや不正行為に対抗することなど、スポーツの高潔さを守ることを扱ってきた。これらは国際オリンピック委員会（IOC）がオリンピック憲章の中で宣言する「IOC の使命と役割」に合致しているもので、引き続き広く伝えていきたいメッセージであると感じている。

教育プログラムを実施することの成果は測定がむずかしく、提供を続けることが社会にどの程度の影響を与えているかはわかりにくい。しかしながら本事業を通じて開発されたプログラムが伝えるのはアスリートの人生や尊厳を守ることにつながり、スポーツが持つ教育的側面や高潔さを守ること、いわばスポーツの価値を守ることにもつながる。そのことについては、その主体が誰であれ、すぐに効果がでなくても、粘り強く伝えていくことが必要なのだと考えられる。

ジュニア競技者と、その保護者のための アントラーズプログラム		
指導者(コーチ)編①		【120分】
セミナー の ねらい	●指導者(コーチ)それぞれの、スポーツ指導哲学を再確認する。 ※指導哲学：指導者(コーチ)として、コーチングで大切にしていることやめざしていくことなど、人生観。 ●指導哲学をもった指導者(コーチ)の姿勢が、選手の育成につながることを理解する。	〈時間〉 ・第一部(50分) …休憩… ・第二部(50分)
時間	活動内容	備考
導入 5分	1.セミナーの概要を紹介し、参加者の興味・関心を高める。 ①セミナーのテーマを紹介する。 これからの指導者(コーチ)には、暴力やハラスメントの根絶はもちろんのこと、指導者(コーチ)自らの「人間力」を高め、選手の自立を促す指導が求められているということをおさえる。 ②講師が自己紹介をする。 ③アイスブレイクを行う。 今回のセミナーでは、自分の考えを伝えたり、ディスカッションをしたりというグループ活動が位置づけられていることを伝え、アイスブレイクを行い、参加者の緊張を和らげる。	【準備するもの】 ・時計 ・映像 ・ワークシート セミナーの始めに、日程を伝え、セミナーの見通しを立てさせましょう。 例えば、グループで自己紹介を兼ね、自分が育成した「最高の選手」を語らせるなどのアイスブレイクがあります。
展開 ① 35分	2.指導者(コーチ)の理念と哲学について理解する。 ①理念と哲学の言葉の説明をする。 理念：物事のあるべき状態についての基本的な考え。 哲学：自分自身の経験などから得られた基本的な考え。人生観。 出典：三省堂 スーパー大辞林3.0 哲学は、自分自身でつくるものだが、理念というものはあるべき姿であるので、今、自分に期待されている役割について認識し、指導者(コーチ)としての理念を理解する必要があることをおさえる。 ②指導者(コーチ)に求められる理念を説明する。 ・ ワークシート ワークシートを配付し、P.4 グッドコーチに向けた「7つの提言」を紹介する。 コーチには、これまでとは異なる意識や行動が求められていることをおさえる。例えば、自立したプレーヤーを育てることなどが求められていることを伝える。 ③これからの指導者(コーチ)に求められる哲学を考えさせる。 ！ ワーク① 指導者(コーチ)であるあなたは、「K」を出場させますか？させませんか？ 【個人ワーク 5分】 ・ ワークシート 「指導者(コーチ)のジレンマ」を読ませ、考えをワーク①に記入させる。 【グループワーク 10分】 ・グループで考えを共有させる。必要に応じて、ワークシートにメモさせる。 ・これからの指導者(コーチ)に求められる指導哲学について説明する。 突然訪れる危機的な状況に即座に対応できるようにするために、指導哲学をもっておく必要がある。どんなときにも毅然として対応する、ブレない軸をもっていることが、選手からの信頼を高めることにつながるということをおさえる。 ④自分自身の指導哲学を省みさせ、これからの指導哲学を考えさせる。 ！ ワーク② 自己意識を可視化しましょう。 【個人ワーク 10分】 ・ ワークシート 「指導者(コーチ)の自己認識」に取り組ませ、考えをワーク②に記入させる。 【グループワーク 5分】 ・グループで考えを共有させる。必要に応じて、ワークシートにメモさせる。 ・指導者(コーチ)が指導哲学を明らかにしていることの重要性を説明する。 なぜ、自分は指導者(コーチ)をしているのか。指導者(コーチ)としての自分の目的は何なのか。それらを掘り下げて考えることが、指導哲学を確認するために役立つということをおさえる。	言葉の意味を確認したうえで、アスリートを育てる指導者(コーチ)として必要な資質についてさらに詳しく考えていくことを伝えましょう。 ワークシートを配付したら、氏名を書かせましょう。 各グループは3～4人程度がよいでしょう。 ワークシートには、グループワークの際にメモできる欄を設けています。 自己意識を記述させるときは、思考と内省の時間であることを告げ、落ち着いた状態をつくりましょう。

時間	活動内容	備考
展開 ② 10分	3.指導目的を自覚する。 ①スポーツの目的を理解し、自分の立ち位置を自覚させる。 ・P.2「スポーツの三つの主要目的」を説明する。 スポーツの主要目的は主に三つあり、どれに比重が置かれているかは人によってさまざまである。指導者(コーチ)は、自分の比重の置き方に偏りがないか、他者との比較を通じて認識しておく必要があることをおさえる。 ！ワーク③ あなたは、何を目的に指導をしていますか？ 【個人ワーク 5分】 ・ ワークシート 自分の指導を想起させ、得点を算出、ワーク③に記入させる。 ・指導目的を自覚していることの重要性を説明する。 自分の価値観の偏りに気づき、例えば、「自分はほかの指導者(コーチ)よりも『勝利』に重きを置いているな」など、自覚していることが大事であるということをおさえる。	どれが正解か、ということではないことを事前にアドバイスしてから、セルフチェックさせましょう。 120分のセミナーです。適宜、休憩を入れましょう。
展開 ③ 45分	4.よりよいコーチングスタイルを追求する。 ①三つのテーマに分かれ、自分のコーチングスタイルについて考えを深めさせる。 ！ワーク④ どのような指導スタイルがベストなのでしょう？ 【グループワーク 15分】 ・ ワークシート 参加者に、「命令スタイル」「従順スタイル」「協働スタイル」の三つから、自分に近いスタイルを選択させ、ワーク④に記入させる。また、なぜ、そのスタイルを選んだのか、選ばなかったスタイルは何がよくないのかを記入させる。 ・理想のコーチングスタイルについて話し合わせる。 ・グループごとに、代表者に発表させ、考えを共有させる。必要に応じて、ワークシートにメモさせる。 ・理想のコーチングスタイルについて説明する。 従順スタイルは論外だが、命令スタイルと協働スタイルの、どちらが常によいということではない。しかし、命令スタイルだけでは、選手の自立を促すことは難しいということをおさえる。 ②指導者(コーチ)による講話(映像)を聞き、自らのコーチングの参考にさせる。 ▶ 映像視聴 『5人の指導者の「指導哲学」「指導目的」「コーチングスタイル」とは』 【15分(5人×3分)】 ・トップレベルの指導者(コーチ)の指導哲学の共通点を説明する。 指導哲学はその指導者(コーチ)の状況によってさまざまだが、日本代表レベルをめざす指導者(コーチ)の考え方には、共通する部分も多いということをおさえる。 ③ディスカッションを通して、これからの指導者(コーチ)に求められる哲学について理解を深めさせる。 ・哲学について改めて説明する。 哲学とは、自分自身の経験などから得られた基本的な考え、人生観である。現時点で、これから先の人生を通じて、何をする・何ができる指導者(コーチ)をめざすのかを考えることが大切であるということをおさえる。 ！ワーク⑤ これからの指導者(コーチ)に求められる「指導哲学」とはどんなものなのでしょう？ 【グループワーク 15分】 ・グループでディスカッションさせる。 ・時間があれば、グループごとに、代表者に発表させ、考えを共有させる。 ・ ワークシート 必要に応じて、ワーク⑤にメモさせる。 ・指導哲学をもっていること自体の重要性を説明する。 その人その人で指導哲学はさまざまなものである。時々振り返って自分の哲学を磨きなおし、その哲学に基づいた意思決定・行動をすることが、選手やほかのアントラージュとの信頼関係の構築に役立つということをおさえる。	あらかじめ、話し合いの最後に発表があることを伝え、司会者・発表者を決めるように指示しておく、全体進行がスムーズにいきます。 映像を見やすい位置に座席を移動させましょう。 全体の時間を延ばすことができる場合は、この部分に時間をかけましょう。
まとめ 5分	5.これから、よりよい指導者(コーチ)として力を発揮していこうという意欲を高める。 ①めざす指導者(コーチ)像をはっきりさせる。 ・「優秀なスポーツコーチの資質」(国際オリンピック委員会(IOC)提供)を紹介する。 指導者(コーチ)は学ばべきことが多い。しかし学び続ける姿勢を選手に見せることが、自ら学ぶ選手の育成につながる。確立した指導哲学をもつことが、必ず選手に影響を与えることを伝える。	セミナーの最後には、今後、自分のコーチングがうまくいくように、明るく終われるようにしましょう。

新しい時代にふさわしいコーチングの確立に向けて ～グッドコーチに向けた「7つの提言」～

「コーチング推進コンソーシアム」（以下、「コンソーシアム」という。）は、「スポーツ指導者の資質能力向上のための有識者会議（タスクフォース）報告書」（平成 25 年 7 月）に基づき、オールジャパン体制でコーチング環境の改善・充実に向けた取組を推進するため、我が国を代表するスポーツ関係団体や大学、クラブ、アスリートなどを構成員として設置（平成 26 年 6 月）されたものです。

我が国においては、2020 年オリンピック・パラリンピック東京大会を契機として、世界に誇れる我が国のコーチングを確立するとともに、2020 年以降も有形無形のレガシーとして、持続可能なスポーツ立国の実現に向けた取組が一層求められています。

そこで、コンソーシアムでは、全ての人々が自発性の下、年齢、性別、障害の有無に関わらず、それぞれの関心・適性等に応じてスポーツを実践する多様な現場でのコーチングを正しい方向へと導くため、「グッドコーチに向けた『7つの提言』」を取りまとめました。

さらには、グローバル化が進展する現代において、国内はもとより、諸外国で活躍するコーチなど、国際社会の中でコーチングに関わる全ての人々にも参考としていただくことを期待しています。

今後、コンソーシアムの構成団体を通じて、7つの提言を広く関係者に呼びかけ、コーチング環境の改善・充実を図っていくこととしています。

平成 27 年 3 月 13 日
コーチング推進コンソーシアム

グッドコーチに向けた「7つの提言」

スポーツに関わる全ての人々が、「7つの提言」を参考にし、新しい時代にふさわしい、正しいコーチングを実現することを期待します。

1 暴力やあらゆるハラスメントの根絶に全力を尽くしましょう。

暴力やハラスメントを行使するコーチングからは、グッドプレーヤーは決して生まれないことを深く自覚するとともに、コーチング技術やスポーツ医・科学に立脚したスポーツ指導を実践することを決意し、スポーツの現場における暴力やあらゆるハラスメントの根絶に全力を尽くすことが必要です。

2 自らの「人間力」を高めましょう。

コーチングが社会的活動であることを常に自覚し、自己をコントロールしながらプレーヤーの成長をサポートするため、グッドコーチに求められるリーダーシップ、コミュニケーションスキル、論理的思考力、規範意識、忍耐力、克己心等の「人間力」を高めることが必要です。

3 常に学び続けましょう。

自らの経験だけに基づいたコーチングから脱却し、国内外のスポーツを取り巻く環境に対応した効果的なコーチングを実践するため、最新の指導内容や指導法の習得に努め、競技横断的な知識・技能や、例えば、国際コーチング・エクセレンス評議会（ICCE）等におけるコーチングの国際的な情報を収集し、常に学び続けることが必要です。

4 プレーヤーのことを最優先に考えましょう。

プレーヤーの人格及びニーズや資質を尊重し、相互の信頼関係を築き、常に効果的なコミュニケーションにより、スポーツの価値や目的、トレーニング効果等についての共通認識の下、公平なコーチングを行うことが必要です。

5 自立したプレーヤーを育てましょう。

スポーツは、プレーヤーが年齢、性別、障害の有無に関わらず、その適性及び健康状態に応じて、安全に自主的かつ自律的に実践するものであることを自覚し、自ら考え、自ら工夫する、自立したプレーヤーとして育成することが必要です。

6 社会に開かれたコーチングに努めましょう。

コーチング環境を改善・充実するため、プレーヤーを取り巻くコーチ、家族、マネージャー、トレーナー、医師、教員等の様々な関係者（アントラージュ）と課題を共有し、社会に開かれたコーチングを行うことが必要です。

7 コーチの社会的信頼を高めましょう。

新しい時代にふさわしい、正しいコーチングを実践することを通して、スポーツそのものの価値やインテグリティ（高潔性）を高めるとともに、スポーツを通じて社会に貢献する人材を継続して育成・輩出することにより、コーチの社会的な信頼を高めることが必要です。

セミナー
の
ねらい

- 指導哲学に基づく意思決定を体験する。

〈 時間 〉
50分

時間	活動内容	備考
導入 5分	1.セミナーの概要を紹介し、参加者の興味・関心を高める。 ①セミナーのテーマを紹介する。 いくつかの危機的場面において、指導哲学に基づく意思決定とはどのようなものかを体験するという、セミナーのテーマとねらいを伝える。 ②「指導者(コーチ)の自己認識」を改めて確認する。 初回の研修内容のうち、特に、指導者哲学①「なぜ、あなたは指導者(コーチ)をしているのですか?」をふりかえるよう伝える。	【準備するもの】 ・時計 ・映像 ・ワークシート セミナーの始めに、日程を伝え、セミナーの見通しを立てさせましょう。 必要に応じて加筆させることも有効でしょう。
展開 40分	2.反人道的行為、反社会的行為について理解する。 ①資料をもとに、説明をする。 ・ ワークシート ワークシートを配付し、P.4「反人道的行為」「反社会的行為」の説明をする。 どれも、あってはならない行為である。本人がやってはならないのはもちろん、他者が被害にあいそうな状況や、加害者になりかねない状況にも適切に対処する必要があるということをおさえる。 3.反人道的行為、反社会的行為について考えを深める。 ①個人ワーク、グループワークでの抽出事例検討と、他事例についての全体共有を行う。 ワーク① 指導者(コーチ)であるあなたは、どのように対応しますか? 【個人ワーク 5分】 ・ ワークシート 「パワーハラスメント」「セクシャルハラスメント」「ドーピング」「八百長」の4つのテーマから、考えを深めたいもの一つ、選ばせる。 解説文と事例を読ませ、自分の考えに近いものを記号で選ばせる。 また、なぜその選択肢を選んだのか、考えを②に記入させる。 【グループワーク 15分】 ・参加者を、選択したテーマごとに座席移動させ、グループをつくらせる。 ・グループで考えを共有させる。必要に応じて、ワークシートにメモさせる。 ※同じテーマを選択したグループが複数ある場合は、全体共有の前に、グループを合体させて同テーマグループ間での意見共有を行わせる。 【全体共有 15分】 ・グループごとに、代表者に発表させ、考えを共有させる。必要に応じて、ワークシートにメモさせる。 ・指導者(コーチ)の反人道的行為、反社会的行為が及ぼす影響について説明する。 反人道的・反社会的行為は、アスリートの将来だけでなく、指導者の将来、その競技種目の将来も奪うことになる。また、スポーツの商業的価値の高まりに伴い、さまざまな行為が他人事でなくなっているということをおさえる。	ワークシートを配付したら、氏名を書かせましょう。 反人道的行為、反社会的行為についての資料は、次ページに添付しています。受講者用ワークシートには、P.4に添付してあります。 各グループは5人程度がよいでしょう。 ワークシートには、グループワークの際にメモできる欄を設けています。 あらかじめ、話し合いの最後に発表があることを伝え、司会者・発表者を決めるように指示しておく、全体進行がスムーズにいきます。
まとめ 5分	4.これから、よりよい指導者(コーチ)として力を発揮していこうという意欲を高める。 ①めざす指導者(コーチ)像をはっきりさせる。 スポーツを我が国の文化にしていこうため、スポーツの社会的価値を高めていくためには、その中心的な役割を担うアスリートの価値を、それを取り巻く関係者が連携協力しながら守っていく必要があるということを伝える。	セミナーの最後には、今後、自分のコーチングがうまくいくように、明るく終われるようにしましょう。

【参考資料】

反人道的行為

■身体的・精神的暴力及び言葉の暴力

身体的暴力とは殴る、蹴る、平手打ち、バットや竹刀でたたく、物を投げつけるなどの行為、および直接身体に触れないとしても同様の行為により威圧することを指し、刑法によって定められています。

アスリートの人格や尊厳を否定するような発言は言葉の暴力です。こうした発言や相手の存在を無視するなどの態度によって、相手をコントロールしたり精神的に追い詰めるような状態になれば、そうした行動は精神的暴力という意味合いをもちます。

■性暴力及びセクシャルハラスメント

性暴力は、身体的暴力や脅迫を伴う、相手の望まない性的行為を指し、刑法や民法によって定められています。強姦・準強姦や強制わいせつ行為は言うまでもありませんが、権力をもつ者がアスリートに対してその権力を濫用することによって、あたかも相手が望んで受け入れているように見える事例（性的虐待）も報告されています。

また、セクシャルハラスメントは、相手が不快や不安を感じる性的な言動であり、それを拒否したり受け入れたりすることによって相手に利害が及ぶような言動を指します。セクシャルハラスメントの加害者は必ずしも男性で被害者は女性であるとは限りません。

■差別

年齢、性別、性的指向や性自認、障がいの有無、国籍、文化、言語、民族、人種、宗教などの特徴を理由に、相手の扱いに差をつけたり相手を嘲笑・侮辱する、さらには集団から除外する、あるいは関わりを拒否する言動を意味します。

反社会的行為

■ドーピング及び禁止薬物の使用

ドーピングとは競技能力を増幅させる可能性がある手段（薬物あるいは方法）を不正に使用することであり、スポーツの基本理念であるフェアプレーに反する行為です。覚せい剤や麻薬等の使用禁止は刑法によって定められています。

■八百長（勝敗の操作、買収）

八百長とは欺きや威力を用いて審判や選手を操作し、賭博の対象となっている試合の勝敗の行方を意図的に操作する詐欺です。フェアプレーに反する行為であるのはもちろんのこと、違法な賭博組織や反社会的勢力への加担禁止は刑法や民法によって定められています。

■違法賭博

違法賭博とは法的に認められていない賭博行為のことです。賭博の常習や賭博の開帳を禁止することは刑法によって定められています。

■権限の乱用

スポーツ指導者がもつ権限を背景に、便宜供与や物品提供の強要、受領をすることは、反社会的行為といえます。

出典：スポーツ指導者のための倫理ガイドライン、公益財団法人日本体育協会

ジュニア競技者と、その保護者のための
アントラーズプログラム

保護者編

【120分】

セミナー
の
ねらい

- 保護者それぞれの、スポーツ子育て哲学を再確認する。
※スポーツ子育て哲学：保護者として、子育てにおいて大切にしていることやめざしていくことなど、人生観。
- 選手が、スポーツ生涯を通じた成長が続けられるよう、周囲の人々との協力体制を確立する。

〈時間〉
・第一部(50分)
…休憩…
・第二部(50分)

時間	活動内容	備考
導入 5分	1.セミナーの概要を紹介し、参加者の興味・関心を高める。 ①セミナーのテーマを紹介する。 「『なぜ、保護者自身は子供のスポーツ参加を支えているのか』を明確にすることで、子供に訪れるさまざまな転機に適切に対応できるようになる。」という、セミナーのテーマを伝える。 ②講師が自己紹介をする。 ③アイスブレイクを行う。 今回のセミナーでは、自分の考えを伝えたり、ディスカッションをしたりというグループ活動が位置づけられていることを伝え、アイスブレイクを入れることで、参加者の緊張を和らげる。	【準備するもの】 ・時計 ・映像 ・ワークシート セミナーの始めに、日程を伝え、セミナーの見通しを立てさせましょう。 例えば、グループで自己紹介を兼ね、保護者としても感じる「子供が頑張っているところ」を話し合わせるなどのアイスブレイクがあります。
展開 ① 35分	2.アスリート子育ての理念と哲学について理解する。 ①理念と哲学の言葉の説明をする。 理念：物事のあるべき状態についての基本的な考え。 哲学：自分自身の経験などから得られた基本的な考え。人生観。 出典：三省堂 スーパー大辞林3.0 哲学は、自分自身でつくるものだが、理念というはあるべき姿であるので、今、自分に期待されている役割について認識を深める必要があるということをおさえる。 ②スポーツ子育ての哲学を考えさせる。 ！ワーク① 学校運動部とジュニアユースクラブ、進路で迷っています。あなたは、家族会議でどのようなことを話しますか？ 【個人ワーク 5分】 ・ ワークシート ワークシートを配付し、「保護者のジレンマ」を読ませ、考えをワーク①に記入させる。 【グループワーク 10分】 ・グループで考えを共有させる。必要に応じて、ワークシートにメモさせる。 ・保護者に求められるスポーツ子育ての哲学について説明する。 子供の悩みや、突然訪れる危機的な状況に即座に対応できるようにするためには、子育て哲学を明確にしておくことが有効である。スポーツ子育てにおいて、ブレない軸をもち、どんなときにも毅然として対応することが、子供からの信頼を高めることにつながるということをおさえる。 ③自分自身のスポーツ子育ての哲学を省みさせ、これからの哲学を考えさせる。 ！ワーク② 自己意識を可視化しましょう。 【個人ワーク 10分】 ・ ワークシート 「保護者の自己認識」に取り組ませ、考えをワーク②に記入させる。 【グループワーク 5分】 ・グループで考えを共有させる。必要に応じて、ワークシートにメモさせる。 保護者のスポーツ子育て哲学とは、スポーツ子育てにおけるブレない軸、羅針盤のようなもの。これがあれば、迷ったときにも一貫した態度で子供を支えられるようになる。また、これがあれば、子供は安心してスポーツを楽しむことができ、保護者への信頼感が増す、ということをおさえる。	言葉の意味を確認したうえで、アスリートを育てる親として必要な資質についてさらに詳しく考えていくことを伝えましょう。 ワークシートを配付したら、氏名を書かせましょう。 各グループは3～4人程度がよいでしょう。 ワークシートには、グループワークの際にメモできる欄を設けています。 自己意識を記述させるときは、思考と内省の時間であることを告げ、落ち着いた状態をつくりましょう。 さまざまな考えが出てくることが予測されますが、「ブレない軸をもっているかどうか」が重要であることをお伝えしましょう。

時間	活動内容	備考
展開 ② 10分	3.スポーツ子育ての目的を自覚する。 ①スポーツの目的を理解させ、自分の立ち位置を自覚させる。 ・P.3「スポーツの三つの主要目的」を説明する。 スポーツの主要目的は主に三つあり、どれに比重が置かれているかは人によってさまざまである。保護者は、自分がどのように比重をかけているか、自覚しておく必要があることをおさえる。 ！ワーク③ あなたは、何を目的にスポーツ子育てをしていますか？ 【個人ワーク 5分】 ・ ワークシート 自分の子育てを想起させ、得点を算出、ワーク③に記入させる。 ・スポーツ子育ての目的を自覚していることの重要性を説明する。 自分の価値観の偏りに気づき、例えば、「自分はほかの保護者よりも『勝利』に重きを置いているな」など、自覚していることが大事であるということをおさえる。	どれが正解か、ということではないことを事前にアドバイスしてから、セルフチェックさせましょう。 120分のセミナーです。適宜、休憩を入れましょう。
展開 ③ 45分	4.よりよいスポーツ子育てスタイルを追求する。 ①三つのテーマに分かれ、それぞれ三つの具体的なスポーツ子育てスタイルから、自分のスポーツ子育てスタイルについて考えを深めさせる。 ！ワーク④ どのようなスポーツ子育てスタイルがベストなのでしょう？ 【グループワーク 15分】 ・参加者を、希望に沿って「子供への接し方」「学校と教育、キャリア」「コーチと保護者」の三つのテーマに分け、移動させて座らせる。 ・三つのスポーツ子育てスタイルのうち、自分に近いものを選択させる。 ・理想のスポーツ子育てスタイルについて話し合わせる。 ・グループごとに、代表者に発表させ、考えを共有させる。 ・ ワークシート 必要に応じて、ワーク④にメモさせる。(ワークシートはP.4) ・理想のスポーツ子育てスタイルについて説明する。 ②講話(映像)を聞き、自らのスポーツ子育ての参考にさせる。 ▶ 映像視聴 『4人の保護者の「哲学」「価値観」「行動」とは』 【15分(4人×3分)】 ・トップレベルの保護者のスポーツ子育ての共通点を説明する。 哲学、価値観、行動はさまざまであるが、卓越した選手を育てた保護者は、共通して明確な哲学を持っていることをおさえる。 ③ディスカッションを通して、これからのスポーツ子育てについて理解を深める。 ！ワーク⑤ なぜ、あなたは子供にスポーツをさせる(支える)のですか？ 【グループワーク 15分】 ・グループでディスカッションさせる。 ・時間があれば、グループごとに、代表者に発表させ、考えを共有させる。 ・ ワークシート 必要に応じて、ワーク⑤にメモさせる。 ・スポーツ子育てについて哲学をもっていたりスタイルを確立していることの重要性を説明する。 スポーツを心から楽しませることはとても大切である。しかしスポーツにはそれ以外の価値もある。そこに気づき、うまく利用すると子供の可能性はさらに広がるということをおさえる。	ワークシートP.4を読ませ、参加者を三つのテーマに分けましょう。 各グループは5人程度がよいでしょう。 あらかじめ、話し合いの最後に発表があることを伝え、司会者・発表者を決めるように指示しておく、全体進行がスムーズにいきます。 映像を見やすい位置に座席を移動させましょう。 全体の時間を延ばすことができる場合は、この部分に時間をかけましょう。 全体発表の際は、特にほかのテーマを選択したグループの発表を聞き合えるよう、配慮しましょう。
まとめ 5分	5.これから、よりよいスポーツ子育てをしていこうという意欲を高める。 ①めざすスポーツ子育て像をはっきりさせる。 ・「保護者に役立つヒント」(国際オリンピック委員会(IOC)提供)を紹介する。 国際オリンピック委員会からの、「子供が、短期的な競技力向上や商業主義に惑わされることなく、生涯を通じた成長(選手として、社会の一員として)が続けられるよう、周囲の人々が協力しあう必要がある」というメッセージを伝える。	セミナーの最後には、今後、自分のスポーツ子育てがうまくいくように、明るく終われるようにしましょう。

MEMO

MEMO

MEMO

■アスリートアントラージュワーカーキンググループ(本事業運営担当)

グループ長	高 橋 尚 子	JOC理事
グループ員	田 辺 陽 子	JOC理事
”	荒木田 裕子	アスリート専門部会長
”	高 橋 義 雄	筑波大学
”	守 屋 麻 樹	ローレルゲート株式会社
”	滝 澤 幸 孝	(公財)日本障がい者スポーツ協会
”	萩 原 直 樹	(公財)日本オリンピック委員会
”	相 馬 浩 隆	(公財)日本オリンピック委員会

■JOCアントラージュ専門部会

部 会 長	高 橋 尚 子	JOC理事
副部会長	齋 藤 泰 雄	JOC常務理事
”	田 辺 陽 子	JOC理事
部 会 員	荒木田 裕子	アスリート専門部会長
”	塚 原 光 男	JOC理事
”	竹 内 浩	(一社)共同通信社
”	菊 幸 一	筑波大学

■事務局

理事・事務局長	日比野 哲 郎
総務部	鈴 木 美 穂
本事業担当	赤 石 京 子
	小 林 忠 広

スポーツ庁委託事業

平成27年度コーチング・イノベーション推進事業
「アスリート・アントラージュ」の連携協力推進

報告書

■プログラムへのお問い合わせは——

公益財団法人 日本オリンピック委員会

〒115-0056 東京都北区西が丘3-15-1

味の素ナショナルトレーニングセンター

TEL 03-5963-0355 FAX 03-5963-0356

担当:相馬 h-soma@joc.or.jp